

道傳人簡

著平軍室山將中



田神京東

部給供及版出軍世救

特212 5

907

0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15

始



特 212
907

道傳人箇

著平軍室山將申

部給供及版出軍世救



序

日本が若し救はるべくば、主として箇人傳道に由つて救はるべく、救世軍が若し日本の救に貢獻すべくば、殊に所謂「一人が一人を」主義の實行によつて、最も多く之を爲し得べきものと信ずる。

此の意味に於て、私は曩に「一人が一人を」と題する小著を公にし、今は又此の「箇人傳道」を、世に出すに至つたのである。

「箇人傳道」は、出来るだけ理論を少くし、成るべく實例を多く擧げて、眞に斯道の實行を志す人々に、據る所を知らし

めんことを力めたのである。

材料は種々雑多の方面から蒐集したのであれど、殊に“Personal Work; or, Bringing Men to Christ” By C. N. Broadhurst. “Every-Member Evangelism” By J. E. Conant, D. D. 及び“Individual Work for Individuals” By H. Clay Trumbull 等に負ふ所が最も多し。

神の御恵此の書の上であり、能く幾らかなりとも、讀者の救靈の熱情を刺激し、殊に其の箇人傳道の實行を奨励する一助とならせ給はんことを、祈るのである。

昭和七年二月

著者

箇人傳道 目次

- 一 緒論……………一
- 二 箇人傳道……………二
- 三 一箇の靈魂……………二
- 四 箇人傳道者……………三〇
- 五 隣人愛の實行……………三九
- 六 集會に誘へ……………四七
- 七 訪問せよ……………五五
- 八 文書を用ゐよ……………六三
- 九 膝詰で説け……………七一
- 一〇 執成の祈(上)……………八一

一 執成の祈(下)……………八九

二 品性の感化……………九七

三 救靈の祝福……………一〇六

四 總動員……………一一五

五 基督の模範……………一二四

箇人傳道

山室軍平著



一 緒論

「一千九百年前、基督が十字架にかけられ、死にて甦り、四十日の間弟子たちに現れたる後、天に歸り給ふ代りに、其の儘此の世に留り、引續き自ら、救世濟人の業を行ひ給うたとしたら、どうであらう。試みに彼は先づ印度に入り、その幾億の生靈を救はん爲に働き給うたものと想像する。もとより長く一つ所に滞在し給ふわけにはゆかないから、毎日一つ宛、異なる村落を巡り給ふものとしたら、どうなつたであらうかと考へて見るに、印度には村落の數が多いから、それを一千

九百年間、のべつに巡回せられたとしても、今日尙少くとも、三千箇ほどの巡り残された村落を見出さるべき勘定である」と、かやうに言うた人がある。印度だけで既に然うであるとすれば、印度を終へて後支那に入り、支那を終へて後、朝鮮を経て、日本の内地にでも渡來せらるゝものとすれば、一體其の日の來るのは、今から幾千年後のことであらうか。随分待遠い話と言はねばならない。

それ故神は救世済人の事業を、唯一人の基督にのみ任せて置き給はず、成程救の道は彼に由つて開かせ給うたに相違ないが、之を普及宣傳することは、専ら其の時代時代の基督者、又今日の私共救世済人の如きものに命じて、之に當らせ給ふこととなつたのである。即ちあらゆる基督者、又救世済人等が起ち上り、銘々基督の御名代として、其の立場立場から世の救の爲に戦ふやうにといふのが、神の御取計ひである。基督の御祈の中に、「汝我を世に遣し給ひし如く、我も彼等を世に遣せり」とあり。又其の弟子たちに對する御言に、「汝等は此等のことの證人

なり」などあるのは、この道理をいうたものである。

それ故ペンテコステの日には、「烈しき風の吹き來る如き響」と共に、また「火の如きもの舌のやうに現れ」分れて其處に集つた弟子たちの上にも、平信徒の上にも、男女合せて百二十人の、一人一人の頭の上に止つたとあり。此は聖靈が彼等の上に臨むことによりて、彼等が能力を受け、エルサレム、ユダヤ全國、サマリヤ、及び地の極にまで、主の證人とならん爲の表徴であつた。すなはち世の罪人を救はん爲に、道を開き給うたものは基督であれど、斯して備へられた道を遍く地の極にまでも宣傳し、人々をして進んで其の有難き恩恵に與らしむる責任は、懸つて其の時代時代の聖徒の上にある。それさへ今日の牧師、傳道師とか、又は救世済士官とかいふ如き、その道にかゝり切の人々のみでなく、反つて一般の基督者、又凡ての救世済人に、さうした重き任務を負はせて居給ふことが、之に由つても察せられる。

ステパノが勇ましく殉教の最期を遂げた後、エルサレムに在る教會に對する、大なる迫害が起り、使徒たちの他、平信徒は、皆ユダヤの各地、及びサマリヤの地方に散らされ、或者は職業を離れ、或者は生活の便宜を失ひ、中には一家分散した上に、周囲の人々から嘲けられ、責められ、苦しめらるゝ者も多かつたが、彼等はそんなことの爲に屈せず、反つて其の往く先々にて、大膽に主の十字架を證言した。即ち聖書に、その事を記して「爰に散らされたる者ども、歴巡りて御言を宣べ云々」とあるのは、それである。彼等は所謂専門宗家ではなく、純然たる平信徒の群であつた。救世軍で言へば、下士官、兵士の部類に屬する人々であつた。しかし乍ら彼等は傳道した。あらゆる困難と迫害との真中に在りて、尙も盛んに救靈の聖戦を戦うた。乃ち彼等の中の一人なるピリポが、サマリヤにて、リバイバル運動を開始した如き、その一例に過ぎないのである。

此の如きものが、初代基督教徒のやり口であつたとすれば、此は今日一般の基督教者、又救世軍人が、如何に周囲の罪人を救ふ爲に奮闘すべきかを示す、絶好の模範でなくてはならぬ。

それにも拘らず、世には多く基督教者だ、救世軍人だと名乗りながら、その實一向、基督の證人たる本分を行はず、罪人の救の爲に指一本動かさないものがある。さては毎日顔を合す友人の間に、自分が基督教者であることをすら、認められて居ないやうな人々が少くないのは、どういふ遺憾千萬のことであらう。或人がカムベル・モルガンに對ひ、「私と同じ勤先で、去五年間、毎日卓子を並べて働く同僚の中に、此の間迄、お互にその基督教者たることを知らないものがありました。可笑しいではありませんか」といふと。カムベル・モルガンは答へて、「それは可笑しい處の話ではありません。其の同僚を連れておいでなさい。一緒に神に祈りませう。あなたがたは未だ曾て、新に生れた經驗を有たないのであります」と言うた。それ故私共が若し眞に基督に救はれて居るなら、私共は其の救の恵を世に證言

して居らねばならぬ。「夫れ人は心に信じて義とせられ、口に言ひあらはして救はるゝなり」と、教へられて居るではないか。しかのみならず、私共は又進んで、まだ神を知らず、罪惡の生活に身を委ねて居る人々を、基督の恩恵に入らしめん爲に努力せねばならぬ。使徒パウロは言うた。「基督耶穌、罪人を救はん爲に世に來り給へりとは、信ぜべく、正しく受くべき言なり。其の罪人の中にて我は首なり。然るに我が憐憫を蒙りしは、基督耶穌、我を首に寛容を悉く顯し、この後彼を信じて、永遠の生命を受けんとする者の、模範となし給はん爲なり」と。それと同じやうに、神が今日の私共を、他の多數同胞よりも先に、救に入らせ給うたわけは、私共を偏愛し、他人は滅亡に墮ちて行つても、私共だけは永遠の幸福に入らせてやりたいとの、依怙最眞の沙汰ではない。反つて私共、先に擇ばれた者を模範とし、種草として、後にのこされた多數同胞を、同じ救に入らしめんとの大御心に外ならない。私共の救はれたるは、他人の救はれん爲である。一言にいへ

ば、私共は救はん爲に救はれたものである。

ブラムエル・ブース大將の言に、「救世軍は、救世軍人の爲にのみ存在するものでない」とあり。いふこゝろは、救世軍は唯救世軍人のみが打寄つて、お互に銘銘、神の恩恵を樂んで居れば可いといふ團體でなく、進んで自分たちが受けたと同じ救を、まだ經驗しない人々に分け與へねば止まない人々の、寄合であるべきことを言うたものである。言ひ換れば、世の救の爲に戦はない救世軍は、眞の救世軍にあらず、又罪人の救の爲に盡瘁しない救世軍人は、眞の救世軍人であり得ない、といふ意味である。

然らば私共は、如何にして世の救の爲に戦ふべきか、又如何にして罪人の救の爲に盡瘁すべきかといふに、其の方法は多々ある中にも、私が一つ、特に是非、諸君に御推薦申上げたいのは、所謂箇人傳道の事である。即ち一人が一人を相手に、其の救の爲に盡す働き方である。それはどういふわけか、又それはどういふ

風に行ふべきものか、といふやうな問題に對し、一通の辯明をしたのが、即ち此の小著である。

本書は之を十五章に分ち、最初の四章に於ては専ら箇人傳道の重要性を述べ、凡ての基督者、又救世軍人は、誰も皆之に従事すべき事由を辯じたる後、第五章以下第十二章に至る間に於ては、進んで箇人傳道の仕方數箇條に關し、例を引き、證を擧げて、之を説明してある。即ち左の如し。

第一、先づ大切なるは隣人愛の實行である。理窟づめで相手を説伏するのでなく、反つて愛と親切とを以て、其の爲に盡すのが、箇人傳道の第一義である。(第五章)

第二、彼等を集會に誘へ。しかも根氣好く之を集會に誘へ、彼等を集會に出席せしむることを得たなら、既に四五割方は、之を基督に導き得たも同然である。(第六章)

第三、彼等を訪問せよ。先方から來ないなら、此方から往かねばならぬ。偶に門前拂を喫ふくらゐは覺悟の前で、隨分と忍耐強く、罪人を訪問せねばならぬ。(第七章)

第四、文書傳道を試みよ。一部の「ときこのゑ」又は一卷の「平民之福音」を讀んだのが本で、一人が救はれ、やがて一家が救はれたやうな事實は、數へられぬ程多くある。(第八章)

第五、しかし何というても、最も肝要なるは膝詰傳道である。面とむいて其の人の罪を示し、其の悔改を促すくらゐ、確實なる徹底的の傳道法は他にないのである。(第九章)

第六、それにしても、一切の努力、勞苦に、上よりの御力を添へるものは祈である。先づ神を動かす者のみ、能く人を動かすことを得るのである。(第十章、第十一章)

第七、私共の品性は、私共の言語の效力を定むる計量器である。それ故言語で傳道するのみならず、品性で傳道せねばならぬ。口で人を導くのみならず、身で導かねばならぬ。(第十二章)

然る後、第十三章以下に於て、箇人傳道が、如何に之に従事する者に祝福となるか。箇人傳道は如何に凡ての基督者、又救世軍人が、總懸りで行ふべきものであるかを説き、最後に箇人傳道に於ける基督の模範を學んで、此の篇を終つて居るのである。

二 箇人傳道

四福音書を讀んで驚かるゝのは、耶穌が其の短い公生涯に於て、存外多くの時間と精力とを、箇人の救の爲に用ゐ給うた事實である。耶穌がバプテスマのヨハネの二人の弟子を伴ひ歸り、彼等を相手に叮嚀に之を導きになると、其の一人なるアンデレは、出で行きて、やがて其の兄弟ペテロを連れ來つて、耶穌の弟子とならしめた。此のペテロが後大に用ゐられて、一日に三千人を悔改に導く大説教をするほどの人物となつたのである。其の翌日、耶穌はピリポに出あひ、之を信仰に導き給ふと、彼は直に出でゆきて、其の懇意な友人ナタナエルを耶穌に連れ來つた。耶穌は又ニコデモ一人を相手に、新に生るゝの教義を説き示したまひ、サマリヤの女一人の爲に、活ける水の貴き教訓を垂れ給うた。其の他マタイを收税所に訪ねゆきて、之を召し給ひたる如き、又はザアカイを其の家庭におとづれ

て、之を悔改に至らせ給うた如き、何れも耶蘇が、如何に所謂箇人傳道を重んじ給うたかを示す事實である。

使徒行傳時代になつて後も、ピリポが荒野にて、エテオピアの權官の馬車を呼び留めて同乗し、その權官を救主に導きたる如き、又はダマスコの聖徒アナニヤが、基督教の大迫害者として知られたサウロを其の宿に訪ね、之を新しき信仰に手引したる如き、或は其のサウロ、即ち後のパウロが、ロマの獄中に在つて、主人の家から脱走した一奴隸オネシモを、神に導く爲に苦心したる如き、何れも彼等が、如何に一箇一箇の靈魂を救ふことに、熱心したかを語るものである。

それであるから、今日の私共も亦一箇一箇の靈魂を救ふことに重きを置き、特別に所謂箇人傳道に主力を注がねばならぬ。それはどういふわけかと尋ねらるゝであらうが。そのわけは一箇一箇の靈魂は、何れも皆全世界よりも貴きものだからである。「人全世界を贏くとも、其の生命を損せば何の益あらんや」とある通で

ある。加之、救主耶蘇は、それらの一箇一箇の靈魂を救はん爲に、十字架にかゝつて、血汐を流し給うたのである。それを思へば私共は、一箇の靈魂の救ふ爲に、どれほどの犠牲を拂ひ、又どれほどの骨折をしても、十分その甲斐があるのである。アスバリー監督は、交通の便甚だ悪しき時代の米國を巡回し、深山を越え、大澤を涉り、深林をくゞり、猛獸の危険を冒し、馬に跨つて六千哩を旅行して、傳道した結果、自分に判つた限りでは、唯一人の靈魂を救に導き得たばかりであつたが、彼は少しもその爲に失望しないばかりか、反つて感謝に溢れつゝ言うた。「一箇の靈魂の貴さを思へば、その爲に要した時間も、勞力も、費用も、比較にならないほど、小さいものである。私は更に他の一箇の靈魂を救ふ爲に、今一遍、六千哩の旅行に上ることを厭はない」と。プラムエル・ブース大將は曾て言はれた。「一箇の靈魂が救はるゝ時、大英帝國が亡びても亡びないものが、救はれたのである」と。私共はかく迄、一箇一箇の靈魂の貴きことを考へるにつけて

も、もつともつと箇人傳道に力を打ちこむべき筈である。

次に、一箇一箇の靈魂を救に導くことは、一番確實なる救靈の方法である。ロ
ーランド・ヒルは、しばしば言うた。「私が若し、多數の鑿をならべておいて、
其の上になつと水を撒いたかというて、どれ一つ、水の一ぱい入つた鑿といふは
あり得ない。しかし乍ら私が若し、一箇一箇の鑿を手にとり、それに別々に水を
注いでゆけば、水が何れにも一ぱいになるのは、決して六つかしいことでない。
今多人數列べておいて説教するのと、また一箇一箇に傳道するとの相違は、之
と似た處がある」と。ヘンリー・ウアド・ビーチヤーも亦言うて居る。「私は年を
とればとるほど、一人が一人を相手の説教が、一番有效だといふことを、篤く信
ずるやうになつた。聴衆が一人しか居ないとなつて見れば、今の話は誰にして居
るのかと訝る必要は更にならない。反つて「汝は其の人なり」と、直截簡明に福音を
其の人に傳へることが出来るのである」と。それ故福音宣傳の能率を、極度まで

發揮したいと願ふなら、私共はどうしても、もつともつと箇人傳道に身を入れね
ばならない。

殊に箇人傳道に喜ばしいのは、それが誰にも、何處でも、何時でも、其の志
さへあれば、實行し得らることである。此はどんな無學な人にも、多忙な人
も、其の覺悟次第で、幾らでも實行し得らるのである。此は會館でも、家庭で
も、街頭でも、車中でも、どこでも、其の心がけさへあれば、出来るのである。
此は又日曜日でも、平日でも、朝でも、晩でも、晝休の時間にも、機會さへ捉
へれば行ひ得るのである。ボストンのギッフオード博士が、日曜の朝の説教中
に、「凡ての基督者は皆救靈者たるべきものである。其の心がけさへあれば、誰も
相當に靈魂を救に導き得ない人はない」と、いふ話をする。見すばらしい姿を
した一人の婦人が、後に残つて、博士に會見を求め、「今朝のお話には、多少の例
外がなくてはなりません。私は貧しい寡婦で、年中、夜を日に嗣いで裁縫に従

事し、やつと子供らを餓に迫らないだけに育て、居ります。さうした生活難の中にあつて、他人を信仰に導かうなどというた處で、私みたやうなものには、全く盡し方がないではありませんか」と、いふのを聞いて、博士は「しかし、貴女が他人を導きに外へ出かけることは出来ないとしても、少くとも貴女のお宅に尋ねて来る人々に、信仰をすゝめることは出来るでせう。貴女のお宅に牛乳屋が來ますか。何、毎日參りますとな、宜しい。パン屋が參りますか、毎日參りますとな、宜しい。肉屋が參りますか。折々參りますとな。結構です。さういふ人たちに一言づつ、基督を證言しただけでも、立派に傳道になるではありませんか。一つ其のつもりでやつて御覽なさい」と、叮嚀に彼女に勸告したのである。

婦人は家に歸つた後、博士から言はれた通を實行するつもりで、其の晩神に祈つて十分覺悟を定めた上、翌朝牛乳屋が來るのを待受けて、「牛乳屋さん、ちよつと待つて下さい。貴君は基督者ですか。基督は私共を救ふ爲に、十字架にかゝ

つて死んで下さつたのですが、貴君は其の基督を救主とし、又友だちとして、うけいれてお在ですか」と、問ひかけられて牛乳屋は、手に持つた鉢力の罐を取落さんばかりに喫驚し、「奥さん、何だつて、貴女は急にそんな話をし出したのです。私は二日前から、自分の行の正しくないことに心づき、こんな眞似をして一生涯を過したのでは、全く生きた甲斐がないことを悟り、どうにかして本當の信仰に入りたいたいのと、頻りに考へ込んで、實は昨晩など、碌々寝ないで夜を明かした位です。貴女がそんなに私の靈魂のことを心配してくれるなら、一つ私の爲にお祈りして下さい」といふやうなわけで、二人はそこに跪いて共に神に祈禱した。此んなことが手始で、彼女の家をおとなふほどの人々は、牛乳屋でも、パン屋でも、肉屋でも、郵便集配人でも、機を捉へて之に基督を證言し出した結果、到頭最初の一年間に、計七人を救主に導くことが出來た。

それであるから、靈魂を救ふことを、唯救世軍の士官や、又は牧師、傳道師は

かりの、役目のやうに考へてはならぬ。眞の基督者は凡て皆、救靈者たるべきものである。即ち基督が、「失せたる者を尋ねて救はん爲に來り」給うた大御心を心とし、人を救ひ世を救ふことを其の一生の大目的として働き、又盡すべきものである。しかも其の大目的を實行する手段として、最も適切且緊要なるは、所謂箇人傳道である。即ち「一人が一人を」救に導く運動であることを知らねばならぬ。何となれば、此は基督直傳の最も有效なる救靈戦の仕方にて、又誰にも、どこでも、いつでも、實行し得べき、最も一般的の傳道法だからである。ライマン・ピーチャーは其の最後の病床に於て言うた。「人が地上にてなし得る最大の事業は、一箇の靈魂を耶穌基督に導くことである」と。それ故私共は、もつと箇人傳道を重んじ、所謂宗教家のみならず、平信徒總がかりで、其の爲に奮闘するやうでなくてはならぬ。

トロー博士は「箇人傳道の利益」八箇條を説かれた。今其の大要を擧げれば左の如し。

第一、誰にても出来る。多人數を相手に説教しろと言はれては、當惑する人々も、箇人傳道なら出来る。或る忙しい一家の主婦は、箇人傳道によりて、其の子等を基督に導いたのみならず、出入の商人を始め、家に訪れて來るほどの人々に救を證言して、その結果、大概の牧師よりも以上に、多數の靈魂を神に立歸らせた。紐育の貧民窟から救はれた一少女は、一二年の間、病床に横たはつた儘、身動きが出来ないにも拘らず、それでも箇人傳道によつて、約百人の男女を基督に導いた。英國の一人の女中は、其の主人の少年を信仰に導いた所が、それが後に有名なシャフツベリー卿として、社會上、人道上に、偉大なる貢獻をする人物となつたやうな例もある。

第二、どこでも出来る。説教演説はしたくも出来ない場所。箇人傳道なら出来る。箇人傳道は貧民の茅屋にも、富豪の高樓にも、病院にも、養育院にも、刑務所にも、ステーションの待合室にも、その他如何なる場所にも、之を試み得るのである。

第三、いつでも出来る。諸種の集會、又日曜學校等は、それぞれ一定の時間に之を營む他はない。しかし乍ら箇人傳道は、一週の中何れの日でも、又一日の中如何なる時でも、之を行ふことが出来る。米國ては去二十年來、夜半に街頭にて、そこらをうろついて居る人々、又は醜業窟から出て來たやうな人々を捉へ、箇人傳道をして大なる成功を收めて居る。

第四、あらゆる階級の人に觸れられる。病人、老人、其の他て家から外に出にくい人々があり、又は電車、運轉手、警察官、鐵道従業員、其の他服務の都合で集會に出られない者も少くない。しかし乍ら私共は箇人傳道によりて、さうした人々をも、救主に導くことが出来る。

第五、人見て汗説くことが出来る。説教では其の言ふ所が兎角一般的になる。けれども箇人傳道では、眞直に其の人に肉迫することが出来る。ムーデーの如き大説教者でも、説教で導き得なかつた人を、箇人傳道によつて基督に連れ來つた例が、多くある。

第六、徹底的の取扱が出来る。説教を聞いて感動し、その罪を認め、又は回心した人々と雖も、箇人傳道によつて、之を一層、明快確實なる經驗に入らしむべき必要がある。

第七、他の方法の届かない所を補足する。數年間續けて集會に列り、有名な宗教家の説教も度々聽聞しながら、尙救を受けなかつた婦人が、一度求道者會で、或人から箇人的の教導を受け、直に救を求めたばかりか、後には基督の爲に、有用の奉仕をなすに至つたものがある。

第八、其の結果が甚だ大い。他の如何なる方法も、之に比すべきものがない。例へばこゝに百人の會員を有する一教會があり、優秀なる牧師の指導の下に、一年に五十人の新會員を加へたとすれば、素晴らしい成功といふのであらう。しかし乍ら若し、その百人の半數即ち五十人が、箇人傳道に力を盡したとすれ

ば、恐らく銘々、毎月一人宛を基督に導くことを得べく、一年には計五百人を、救主に連れ來ることが出来る。それであるから、他の如何なる方法を以てしても、未だ箇人傳道ほど手廣く、迅速、且有效に、多數の靈魂を救ふ道はないのである。

三一箇の靈魂

ダニエル・ウエブスターは曾て言うた。「私共が若し大理石に彫刻するなら、それは磨滅することがあらう。青銅に鑄込むなら、それは腐蝕することがあらう。殿堂を建設するなら、それは塵に歸する日があらう。しかし乍ら若し永遠の靈魂に、人間生活の眞の主義を植ゑつけ、之に惡を憎み善を愛することを教へたなら、それは人の品性に、即ちその肉碑に刻みつけたのであるから、月日の移りかはりも、之を塗抹し得ないばかりか、反つて時間の経過すると共に、磨きをかけられて、益々其の光輝を増加へるであらう」と。それゆゑ私共は、どこ迄も一箇の靈魂を尊重して、之が救の爲にはいかなる勞苦をも厭はず、又いかなる犠牲をも甘んじねばならぬ。

一箇の靈魂を救ふことは、其の目當とする靈魂それ自身の爲に、最も大切なことである。それ故私共が若し、幸に用ゐられて、一箇の靈魂を救に導くことが出来たとすれば、それは永遠にかゝはりある大事業を成し得たものとして、心から感謝し、榮光を神に歸し奉るべき筈である。それさへ概して言へば、一箇の靈魂が救はるゝ時は、嘗に其の一箇の靈魂に止まらず、及ぼして他に幾十幾百、或は幾千幾萬の靈魂の救に、影響する場合さへ少くない。それを思へば一箇の靈魂を救ふ爲に働く位、此の世で神々しく、又重要な、神の御業は他にないことが解る。私は今左に、二三の實例を擧げて、それらのことわけを説明して見たいのである。

久しい以前、蘇格蘭の或る教會では、過る一年間、たゞ一人の青年が救に入つただけで、他に一向、信者が出来なかつたといふので、教會の役員たちから、牧師に苦情を持込んだ。牧師は「それでも、全力を盡した上のことであるから、奈何とも致し方がありません」というて、唯面目なげにうなだれて居るのを見て、

其の青年は憤慨し、「先生、今に私が、大人の幾人前の奉仕をするものになりますから、希望を以て、見て居つて下さい」と言うたが、果して其の青年は、後に力ある外國宣教師となり、アフリカに往つて、黒人の救に働く者の先驅者となつた。有名なロバート・モファットといふのは、彼のことであつた。

又多年威斯にて、熱心に傳道に従事した一宗教家があつたが、どういふものか、更に見るべき成功がなく、久しくかゝつて、やつと一人だけ、信仰に導くことが出来た。ところが其の一人が、追々恩寵の中に成長して、後には有力なる救靈者となつた。ワルンのウイリアムといふのは即ち其の人で、彼は全威斯の三分一を、神に従はせたと稱へられて居る。

米國有名の説教者、ライマン・ビーチチャーが、或る冬の寒い夜、田舎の小教會に往つて説教したことがあり。ひどい吹雪の爲でもあつたらうが、集る者としては、彼の他に唯一人しかなかつた。しかし彼は忠實に其の一人の聴衆を取扱ひ、多人

數を相手にすると同じやうに、丁寧に集會を營んだ。それから二十年を経て後、ビーチチャーがオハヨ州の或町に往つた時、一人の紳士が彼にあひ、「あなたは二十年前、某の地にて、冬の寒い夜、一人の聴衆を相手に説教したのを、記憶して居られますか」といふから、「記憶して居ります。而してあの一人の聴衆がどうなつたか、知りたいと思ひます」というた。すると紳士は答へて、「あの一人の聴衆は即ち私であります。私はあの集會によつて志を立て、身を基督に獻ぐることとなり、只今では向に見ゆる、あの教會を受持つて働いて居ります。私の今日あるは、全くあの夜の、あなたのお蔭であります」というて感謝した。彼は其の地方で、有數の大教會の牧師となつて居つたのである。

一八一二年、米國東部の或る地方にて、天幕傳道を舉行した者があり、随分金錢と勞力とを注ぎ込んで盡したにも拘らず、目に見ゆる結果としては、唯一人、十八歳になるブリキの行商人で、ジョン・デムプスターといふものが、信仰に

入つただけであるから、人々は皆互に、「今度の天幕傳道は失敗であつた」と、言はない者はない位であつた。けれども後に至つて人々を驚かしたのは、そのブリキの行商人なる一青年が、やがて米國有数の宗教家、又教育家となつたことである。即ち彼は米國及び加奈太に於て、多數の靈魂を基督に導きたる後、南米に渡つて大なる神の榮光を顯し、歸國した後には、コンコルドと、エヴァンストンとに、聖書學校を創立したが、それらの學校にて養成せられた人物は、諸方に散つて、更に幾千幾萬の靈魂を救主に連れ來るに至つたのである。斯して最も失敗したと見えたる天幕傳道は、實は世に比びなき大成功であつたことが、後に至つて凡ての人に認められたのである。

英國のコレチエスターにて、無學な一説教者が、或る日曜日の夜、イザヤ書第四十五章二十二節「我を仰ぎ望め、さらば救はれん」といふ聖句を讀んで、熱心に説教しつゝ、多くもあらぬ聽衆の中に一人、極めて眞劍らしい青年が居るのを

見て、之に呼びかけ、「青年よ、君も何か心に不満足を覺えて居らるゝやうだが、若しさうなら、基督は今君に對うて、「我を仰ぎ望め、さらば救はれん」と宣うて居るのである」と、いふのを聞いて青年は感動し、それから覺悟を定めて基督に身を獻げ、程なく傳道界に投ずることとなつた。それが近世最大の説教者と呼ばるゝ、チャールス・エチ・スボルジョンであらうとは、當時誰も想像し得なかつたのである。

愛蘭の或る町に、一人の篤信な信者があり、毎日曜日、舊い納屋で小集會を營んで居つた。そこへ英蘭から旅して其の町に來た、母と子と二人の旅客があり、圖らず日曜日を旅館で過すこととなり、舊い納屋での集會のことを聞いて、出席して見ると、司會者は無學ではあるが、熱心に溢れて、道を語るのに感じ入り、殊に息子の方は其の場で悔改めて、救の恵を身に受けたのである。彼はそれから後身を神に獻げて、有名な説教者、又讚美歌の作者となつた。「ちとせのいは

よ、わが身をかこめ」の讚美歌を作つた、アウガスト・トツブレデーといふのは、其の人であつた。しかも此の歌だけでも、如何に世界幾百幾千萬の人々を教へ、慰め、勵ましたか解らないほど、非常な感化を及ぼしたことは、人の皆知る所である。

救世軍のブラムエル・ブース大將が、まだ二十幾歳の青年時代に健康を害し、或る親切な軍友の取計らひにて、しばらく瑞典に静養せられたことがある。何しろ、あの熱心家のことであるから、静養中とはいへ、需めらるゝまゝに、有志の人を集めて数回の集會を営まれると、そこに集つた人々の中に、ハンナ・オクタロニーといふ中年の婦人があり、頗る熱心に道を求める故、こちらでも忠實に之を教へ、面倒を見て救に導き、更に聖潔に入らしめ、段々の心盡しをせられた甲斐ありて、彼女は間もなく熱烈なる救世軍人となり、英國に渡つて軍隊の働き方等を見習うた後、本國の瑞典に歸つて、救世軍を創めたのである。かくて最初の

間は非常な反對迫害をうけ、彼女を始とし、其の同志にて入牢申附けられた者も少くなかつたが、やがて國民の理解を得て、見る見るうちに、優勢なる救世軍を其の國に打建つるととなつた。オクタロニーは聽て其の國救世軍の司令官となり、中將に任ぜられ、後隣國諾威の救世軍をも創設した。芬蘭の救世軍は、オクタロニー中將が開いたのではないけれども、彼女の風を慕うて起つたハルトマン女史（後中佐に任ぜられた）に由つて、開始せられたのであるから、ここにも彼女の間接の貢獻を見出さるのである。かくして北歐三ヶ國の救世軍創立に與つて力ありしオクタロニー中將は、前申す如く、ブラムエル・ブース大將が青年時代、しかも病氣療養中に、一箇の靈魂を導かれた勤勞の結果として現れたものとすれば、一箇の靈魂が救はるゝ爲には、どれ程の苦勞をなし、又どれ程の盡力をして、十分其の甲斐あることが、今更のやうに思ひ合さるゝではないか。

四 箇人傳道者

或人が夢に、死んで天國の門前に近づくと、そこに番をして居る人が彼にむかひ、「同行は幾人か」と尋ねた。「私一人です」と答へると、「こゝは獨旅をして來る者の入るべき處でないから、今一度出直して、今度來る迄には、屹度幾人か、道連をつくつて來るのだよ」といはれたと見て、目がさめ、甚く平生傳道心の缺けて居つたことを悔いて、それから後は、大に箇人傳道に盡瘁するに至つた、といふ話がある。天國は私共が一人一人、勝手に入つて行けば可い所でない。私共は人を基督に導き、かねがね道連をつくつて、共に天國の門を叩くやうでなくてはならぬ。

「私は去五年間、大に恵まれて、全く變貌山の體験を續けて來ました」といふ者があると、ムーデーは其の人にむかひ、「で、君は最近一年に、幾人を基督に導きましたか」と尋ねた。「それは判りません」と答へると、「君は從來一人の靈魂を導いても、救主に導いたことがあるのですか」と問ひ返した。「それも判り兼ねます」と答へると、「君は自分一人、恩惠の山の頂上を歩いて居つても、山の下下の惱む罪人を、知らぬ顔して棄ておくやうでは、基督の愛を知るものとは言ひ難い。もつと周圍の罪人が、功德を受けるやうな宗教生活を營み給へ」と、ムーデーは彼に忠告したのであつた。

基督者が救靈に不熱心であり、殊に箇人傳道に不熱心である處から、その爲に救はるべき筈の人を、多く救ひそこなうて居るのは、由々しきことといはねばならない。支那から大使として、米國に遣されて居つた伍廷芳は、紐育にて基督教の一集會に出席して言うた。「私は米國に來た當初から、決心する所あり、滯米中若し案内をうけたら、いつでも基督教の集會に出席しようと、待設けて居つたが、一向その案内を受けなかつた。今歸國の間際に此の集會に招かれて出席したのが、

此の國で私が出席する最初で亦最終の集會であります」と。レオン・トロツキの如きも、彼が若くして米國に遊んだ頃、基督教に誘へば、幾らでも誘ふ機會があつたのを逸して、終にああした革命家にならせたのだ、といはれて居る。之も同じ米國での話であるが、一農夫が毎日曜日、表を通る貧しき家庭に、一人の少年があり、之を基督教に導けば可かつたのだが、つい怠つて、見棄て、おいた。處が其の少年が、後にモルモン宗の開祖、ジョー・スミスとして知らるゝ人物となり、基督教とは餘程見當のちがうた説を、唱ふるに至つたのである。それ故私共は心がけて、平素から、出来るだけ多くの人々を基督教に導き、殊に箇人傳道によつて、我等を救主につれ來らねばならぬ。「箇人傳道については、如何なるやりそこなひをしたにしても、之をやつて見ないほど、大なるやりそこなひはないものと、思はねばならぬ。」と、ツラムバルは言うて居る。

箇人傳道は、やればやつただけ、其の甲斐がある。材木商ウィリアム・ドツヂ

は、銀行家ジョン・ロツヂャースと懇意であつたが、ドツヂは日頃から熱心な基督教者である故、甚くロツヂャースのことを心配し、或日特に彼の爲に祈つて言つた。「神よ、どうか、あなたの指を彼に觸れ給へ、あなたの指を彼に觸れ給へ」と。其のうち彼が心づいたことは、「自分は斯して、ロツヂャースの爲に神に祈つて居れど、一體自分自身としては、どれほど彼の爲に盡して居るであらうか」と。そこで或日思ひ切つて彼を訪ね、之に信仰を勧めようと決心して、往つてみると、例によつて彼は快く迎へてくれた。「さて何か特別の用件でも」といはれて「實は極めて大事なことを話に參つたのである。君と實際し出してから、随分長いことであるから、其の間實業につき、政治につき、商況につき、農産物につき、いろいろと語り合つたことはあれど、まだ一度も最も大事な問題、即ち靈魂の救ひのことについて、打ちつけて君と語つたことがない。此は私の怠慢であるから、どうか容赦して、今日は少しく、その話を聞いてもらひたいのである」と言ふと。ロ

ツヂヤースは喜んで「それは有難い。實はこれ迄折々、其の話を、君から聞きたいと思つたこともある位だから、どうか十分話してくれ給へ」といひ、戸にかけがねをかけて、長時間に亙り、靜にドツヂの言ふ所を聽聞した後、彼は其の場で悔改めて、心を基督に獻ぐることとなつた。此の事があつて後、ドツヂが言ふには、「私は神に祈つて、其の指を我が友に觸れ給はんことを求めたが、しかし氣がついて見たら、私こそ彼にふるべき神の指であつた。即ち神が用ゐて彼に觸れしめんと欲し給ふ指は、私であつたことを、今になつて發見したのである」とのことであつた。それ故私共も、其の家族、縁戚、友人等の救の爲に祈るほどなら、亦、其の爲に自分に出来るだけのことをするつもりで、取りかゝらねばならぬ。神は私共を其の指として彼等に觸れしめ、又其の器として、彼等の救の爲に、用ゐんとして居給ふからである。

然らば私共は、如何にして成功ある箇人傳道者たることが出来るであらうか。

それに就いて或人の説に、箇人傳道者に必要なる要性が五つある。第一は、新に生れた心である。自分が救はれて、新に生れた人となつてゐないなら、他人を救はるゝことが出来ないのは、申す迄もない。箇人傳道者は自分が罪から救はれて新に生れたといふ、明かな自覺がなくてはならぬ。第二は、聖書の教を貯ふる頭である。非常に聖書に明るいとは行かなくても、少く共、神につき、罪につき、基督につき、救について、聖書に示された所を心得て居つて、必要の場合には、いつでも聖書をひらいて、人と語ることが出来たら、大變な助となるに相違ない。第三には、靈魂に對する愛情である。パウロは靈魂に對する熱愛に燃えて居つた。それ故「若し我が兄弟、我が骨肉の爲にならんには、我自ら誼はれて、基督に棄てらるゝも、亦願ふ所なり」と言つたのである。基督は又自分を殺す者の爲に祈つて、「父よ、彼等を赦し給へ、そのなす所を知らざればなり」と、仰せられた。此は彼が靈魂を思ふ熱情に溢れて居給うたからである。第四には、祈禱

の生活である。唯さまつて朝夕の祈をするとか、又は何かの場合に、思ひ出したやうに神に祈をするといふのでなく、平生祈の精神に生き、又祈の生活を營んで居るやうでありたい。神はさういふ人々の祈を、喜んで聽容れ給ふのである。殊にさういふ人々の執成の祈を、喜んで聞届け給ふのである。第五には、神の御靈である。人の靈魂を救ふものは、唯神の御業である。「汝等上より力を着せらるゝ迄は、都に留れ」とあり、私共は神の御靈の力によるにあらざれば、唯一人を救に入らしむることが出来ない。けれども上よりの力が私共に來る時、私共は如何なる頑固な人の心をも碎き、又いかなる罪に穢れた人をも、聖徒とならしめ得るのである。

箇人傳道は救世軍士官が行ふのみならず、殊に凡ての下士官、兵士が之を行はねばならぬ。即ち全軍總懸りで、之を行ふやうでなくてはならぬ。箇人傳道の特別に有難い處は、あらゆる神の僕らが、皆之にたづさはり得ることである。神は

少數の所謂宗教家のみ、救世の大業を委ね給はず、萬人皆其の爲に何分の奉仕をなし得るやう、仕向けて下された處が、殊に忝けないのである。數年前、倫敦のヴィクトリア公園の一部が、大雨の後に地すべりを生じ、數人の勞働者が下敷となつて土中に埋められた。それを數十人の人夫が寄つて、掘出すのを、傍觀して居る一男子があり、ポケットに手を入れて、至つて無頓着な態度であつたが、之を見た者の一人が、「ビル、何をぼんやりして居るのだ、土中に埋められた者の中には、お前の兄弟のジムも居るではないか」と言ふと、傍觀して居つた男は、急に其の血相を變へた。直に上着を脱ぎ棄て、シャツの腕を捲ると見ると、早やシヨールベルトをとつて働き出した。働いて働いて働きぬいて、全身油汗に濡れて力めた甲斐があり、到頭其の兄弟を助け出し、之を抱き起して、大喜びに喜んだ。此は其の兄弟の「死にて復生き、失せて復得たる」を喜んだのであつた。今私共も亦、我が同胞の死地に陥つて居るのを救ふ上に、之と同じやうな誠意と熱心と

を以て、努力せねばならぬ。即ち彼等は私共と同じく天の父の子供である。したがつて私共の兄弟姉妹であることを知つて、其の救の爲に眞剣に盡力せねばならぬ。而して其の爲には、殊に銘々が箇人傳道者として盡瘁すべき必要がある。「汝死地に曳かれ行く者を救へ、滅亡によるめく者を救はざるなかれ。汝、われら之を知らずといふとも、心をはかる者之を曉らざらんや、汝の靈魂を守る者之を知らざらんや。彼は各自の行爲によりて、人に報ゆべし」とあり、唯箇人傳道によりてのみ、世界は最も有効に、又最も迅速に、救はるべき望があるのである。以下順序を逐うて、少しく箇人傳道に必要な方法、條件のやうなもの、數ヶ條を考へて見たいと思ふ。

五 隣人愛の實行

傳道とは隣人愛を實行することである。傳道を以て、たゞ理窟で人を説伏することか、なんぞのやうに思うてはならぬ。傳道とは、人を愛することである。神を知らずして罪に生くる人々の、寂しく、乏しく、物足りない生活を見るに見兼ねて、之に清く、明るく、喜ばしき、耶穌の福音を紹介するのが、即ち傳道である。それ故眞の傳道は愛の奉仕に外ならない。したがつて傳道の效果如何は、私共が靈魂に對する愛の程度に準るのである。即ちどれだけ、筋道の立つた話をするかよりも以上に、どれだけ相手の人の爲を思ふかによりて、傳道の成敗は定まることが多い。オバルといふ寶石は、ちよつと見た處では、どんよりと、もやがかつた様であれど、之をしばらくの間、掌で暖めると、急に美しい艶が出る。眞の傳道もまたこれと似て、冷い眞理に暖い人情味を附け加へて後、始めて

其の言ふ所に、人の心を動かすやうな、光と力とを發揮し來るのである。

それ故箇人傳道に、第一大切な事は、其の相手の人々を愛することである。眞に其の人々の爲を思ひ、其の人々の祝福を求むる心から、之に福音を語るなら、それが相手の人々の心を動かさない例は曾てない。「たとひ、我もろもろの國人の言、及び御使の言を語るとも、愛なくば鳴る鐘や、響く鑢鍬の如し」と、パウロが言うたのは、其の意味ではないか。有名なる巡回傳道者ジブシー・スミスが、始めて米國に渡つた時、福音の唱歌者として知られたサンキーが、彼を案内してブルックリン公園を散歩中、スミスが言ふには、「サンキー君、貴君は今から十五年、渡英の節、倫敦市外にて、ジブシーの部落を訪ねた際、そこに居る一青年の頭の上に手を置いて、『我が子よ、汝が他日、神の説教者とならんことを願ふ』というて、祝福せられたのを御記憶になりますか」とのこと故、サンキーは「よく憶えて居ります」と答へると、スミスが言ふには、「其の青年が即ち今日の私で

あります」とのことに、サンキーは驚いて、今更のやうに、小さき愛の行が、案外大きな感化の本となつたのを、感謝したといふことである。

一宗教家が紐育の公園を通りつゝ、そこに勢のない顔した一青年が、よろして居るのを見つけ、之に聲をかけた。「君は大層疲勞して居らるゝやう見受け、握手しませう」といふと、其の青年が答へて言ふには、「私は先頃、友人親族から、丁寧に見送られて郷里を立ち出で、紐育に出ては來たものゝ、さて仕事の見付からないので、そのため去十日間、當途もなく、ぶらりぶらりと、過して來ました。もとより誰一人、知人もなき此の都で、貴君が最初に私に握手してくれた人であります。此の御親切は忘れません」といふ。「明日の日曜日に、集會があるから、おいでなさい。あとで就職の事についても相談しませう」といはれて、青年は大に喜び、日曜日になるのを待ちかねて、集會に出席した後、就職の世話をしてもらひ、兎も角食ふだけの途はついた。それから十五年を経る頃

には、彼は立派な一箇の紳士となり、傳道事業にも相當に力を盡すやうになつた。彼を導いた宗教家の話には、「私もあの時くらゐ、有效な握手をしたことは、曾てなかつたのである」と。

ワシントン市の、或るデパートメント・ストアへ、一貴婦人が買物に來られた。其の手に美しい堇の花を携へて居られるのを見て、女店員が「どういふ好い香でせう」というて褒めると、貴婦人は「公園に行けば、幾らでも咲いて居ます、あなたはまだ見ませんか」と言はれる故、「まだ見ません。仕事が濟んで家に歸れば、疲れて直にやすみますから、花など見に行つて居る餘裕がないのです」と答へると、「それでは日曜日はどうするの」と尋ねられた。女「日曜日は宅に引籠つてやすみます。」貴「それでは次の土曜日の午後、私が馬車で迎に來ますから、一緒にのつて、少し郊外を馳らせ、歸りには公園の堇の花でも賞美しませう。」女「しかし主人が、土曜日の午後は、ひまをくれませんから、駄目でせう。」貴「その事

なら、私が主人に話して見ませう」というて、貴婦人は、さつさとデパートメント・ストアの支配人に面會し、その同意を得て次の土曜日の午後、馬車を持つて來て、彼の女店員を同乗させ、數時間、あちこちと乗りまはした後、公園に連れてゆき、堇の澤山咲いて居る處をも見物させて、これを其の宿所に送り届け、且翌日曜日には基督教の集會に出るやうにと、案内せられた。女店員は其の行届いた親切に逆ひ兼ね、次の日曜日から集會に出始めたのが本で、間もなく眞面目な基督者となつた。しかも此うして女店員に親切をした貴婦人こそ、時の大統領クリーブランドの夫人であつたといふのは、面白いではないか。

紐育市にて、日曜學校の一教師が、新しき生徒を得たいものと、街頭の貧しき一少年をとりまへて、「日曜學校にお出でなさい、爲になるお話を聞かせて上げます」というても、少年は應じなかつた。「奇麗なカードを上げます。」「楽しい音楽を聞かせます。」「面白い歌を教へます。」というても少年は應じなかつた。けれ

ども其の教師が、どこ迄も丁寧親切に、彼を勧誘するのに感心したものと見え、やがて、「さうしてあなたは、其處に居りますか」と問ふから、「ハイ、居ります」と答へると、「それでは行きませう」といふ約束をした。

不良少年感化事業の權威者として知らるゝ留岡幸助氏は、青年の時代に、基督を信仰したため、其の義理ある親から、非常な迫害を受けられた。或時は一ヶ月間、座敷牢に入れられたやうなこともあり、止むを得ないから終に家出をして、しばらくの間伊豫の今治に隠れ、後京都の同志社で勉強せられたのであるが、その頃は國許の父も、段々心が和いで、最早迫害はしない程度に、留岡氏の信仰を認めらるゝことゝなつたので、夏休には、時々、郷里に歸省せられたが、或年の夏休に郷里に歸り、いかにもして、父母を基督教の信仰に導きたいと思ひ、學校で習うた哲學、神學等の話をして、いかに基督教を信仰するのが、道理にかなうたことかといふ辯明をせられると、それを聞いた父上は、母上にむかひ、「これ、

勝や、どうも耶蘇教は理窟ばかり教へるものと見えて、困るのう」と、言うて居られる。それを洩れ聞いた留岡氏が、これでは失敗であつたと心づいた故、翌年の夏休には、ありもしない小遣錢の中から、土産物の一つも買うて歸り、又機を見ては「お父さん、お肩をたゝませせう。」「お母さん、お腰を揉ませせう」というて、大事にすると、父上は母上にむかひ、「これ勝や、耶蘇教でも、親孝行を教へるものと見えて、幸助があんなに、私達を大事にしてくれるのは、嬉しいねエ」と、言はれるやうになつた。それから數年の後、兩親は共に基督教に歸依せられたのである。

それ故箇人傳道に成功したいと願ふ者は、何よりも先づ、其の相手の人々を愛さねばならぬ。即ち所謂靈魂に對する愛情を有することが、大事である。私よくり返して言ふ、傳道とは愛の奉仕に外ならない。眞の傳道とは、隣人愛の實行である。即ち私共が眞劍に他人の爲を思へばこそ、之に耶蘇の福音を傳へて、之

を生命の道に導かん爲に盡瘁する。それが眞の傳道である。しかも此うした靈魂に對する愛は、唯潔められて全き愛の人となり、引續き、愛の神と交つて、其の神々しき御感化を蒙る者にのみ、宿るのであるから、箇人傳道者として成功したいと望む私共は、先づ凡ての罪から潔められて、神と偕なる生活を營んで居ることが、何より肝要である。

隣人愛の實行は箇人傳道に第一大切の方法である。

六 集會に誘へ

或る旅商人が六千哩の長い旅行を經へ、歸つて後言ふには、「私は此度の旅行中、六回酒宴の席に列るやう誘はれた。しかし基督教の集會に出るやう、案内を受けたのは、唯一回のみであつた」と。此は西洋の話である。日本であつたら、酒宴の席に誘はるゝ數は、更に之よりも多く、基督教の集會に誘はるゝ數は、皆無でなかつたらうかと、恐れるのである。しかし乍ら世間の人が若し、其の友人なり知人なりを、酒宴の席に誘ふのを、親切なことのやうに心得て、専ら之を力める位なら、私共基督の僕は又、神を知らざる人々を案内して、「羔の婚筵の席」に列らしむることを、些も躊躇すべき筈がない。私共はもつともつと、其の知己、友人、同僚、さては一切の隣人を、集會に伴ふ爲に盡力せねばならぬ。

集會に出席して、多人數一緒に神を禮拜し、又は聖書の講義など聽聞すると、

平生不信仰な人も其の宗教的雰圍氣に化されて、大に信仰的の氣分になるものである。「心は必ず事にふれておこる」と、徒然草の兼好法師が言うたのは、この道理である。したがつて人を集會に連れ來ることが出來れば、之を信仰に導く上に便利が多いのは、申上げる迄もない。いつぞやも京橋區八丁堀のあたりを通行して居る人が、にはか雨にあひ、どこか雨宿りをする處はないかと思はすうち、救世軍の會館の戸が開いて居つたから、そこへ飛び込んだ。しかも折柄集會の最中であつた故、聞く氣でもなく、お話を聞いて、大に感ずる所あり、其の夜悔改めて信仰に志したやうなことがあつた。ホイットフィールドの聴衆の中には、機を見て彼に石を投げつけんものと、ポケットに石を入れてゆき、彼の説教を聞くうち、反つて其の言ふ所に感動し、迫害者が忽ち求道者となつたやうな例もあると聞く。それ故人を集會に出席せしむることが出來たら、早や五割ぐらゐ、之を基督に導き得たものと見て可い場合が、少くないのである。

私共は力めて、人を集會に誘はねばならぬ。リー將軍は海水浴場に逗留中、或る日曜日の午後、メソヂスト派の一教師が、舞踏場で説教することを聞き、自分ば聖公會に席をおく信者であるにも拘らず、又南北戦争の名將として、人々から尊敬を表せらるる身分であることを忘れ、街頭をゆきつ戻りつ、「今日、午後三時から、舞踏場で集會があります」というて、廣告して歩くと、人々はそれを知りて多く其の會合に列り、中には其の日から信仰に志した者もあつたさうである。日本でも、江原素六氏の如き、代議士として、後には貴族院議員として、種々なる訪問客の絶間のない人であつたが、日曜日の朝來たお客は、大概誘うて、基督教の禮拜に出席させられたと聞いて居る。

會てゴリアと名づくる一青年があり、人生の航海に破船して、身も心も疲れ果て、路頭に迷うて居る處を、一人の友人が見つけ、之を禁酒の集會に誘うと、彼は頭から拒絶した。しきりに之をすゝめると、「それでは往つて見ようか」と言ひ

出した。しかも彼は其の集會に出席した爲に悔改めて、新生涯に入つた結果、後には二十五年に亙り、正義と、克己と、敬虔とを教へて、英米の各地に、大なる感化を及ぼす人物となつたのである。又或時針仕事で飯をくふ貧しき婦人が、一人の少年をすゝめ、之を日曜學校に出席させた處が、少年は引續き、毎日曜日に出席を續け、成人の後には力ある宣教師となつて印度に赴き、テルグスの地方に傳道した。それがもとにて、今では其の地方に三萬人からの基督者を見るに至つた由。其の宣教師の名はアモス・サットンといふのであつた。

救世軍の創立者ブース大將が、某市にて、特別集會に臨まんとて、馬車を驅つて會場に赴き、車から降りらると、これを出迎へた人々も多數あつた。が、彼は其の眞前に立つ一人の男と握手し、「貴君も集會に出席するでせうね」といはれると、答へて「私は駄目です、狗をつれてゐますから、入れないのです」というた。「宜しい、大將が知つてゐるからというて、狗をつれたまゝお入りなさい」

といひ、且其の祕書に命じて、其の人を會場の前列に案内するやう、取計らはれた。そこで彼は喜んで集會に出席したばかりか、會の終に大將が、新に悔改めて信仰に志す者をまねかれると、彼は誰よりも先に進み出て、基督の救を求めたといふことである。

それ故私共は人を集會に誘はねばならぬ。人を集會に誘ふことは、之を基督に導く爲の、一つの最も有效なる方法である。或る眼の悪い老人が、出あふほどの人々を集會に案内し、果ては或る商館の店頭に飾つてある、印度人の姿をした大なる木像に迄、丁寧に會釋して之を集會に誘うて居るのを見て、人々が之を嘲けると、彼は答へて「しかし折角基督に救はれながら、何一つ働きのない、木像のやうな基督者たるよりは、寧ろ木像をでも案内する、活動的の基督者であつた方が可いではないか」と、いうたさうである。とはいへ、集會に案内せられた人々が、残らず集會に出席するわけではない。中には何遍誘うても、更にその甲斐が

なく、一切之に應じない人もあらう。ケンブリッジ大學の一學生は、或時モット博士にむかうて言うた。「私は十六回、集會に誘はれても、之に應じなかつたが、十七回目始めて出席して、それから信仰に入りました」と。それであるから、人を集會に案内するのも、仲々の根氣を要するものと思はねばならぬ。「忍耐をして全き活動をなさしめよ、これ汝等が全く且備はりて、缺ぐる所なからん爲なり」とは、人を集會に導かんとする者の、心得ておかねばならない教訓である。

人を集會に案内する者は、集會の時のみならず、その前後に氣をつける必要がある。即ち集會の前には、其の人が心を開いて御教を受けん爲に盡し、又祈らねばならぬ。集會の後には、彼の心に播かれた御教の種を培養し、之を成長繁茂せしめん爲に努力せねばならぬ。或る宗教家の説教を聴聞して、大に感動した聽衆の一人が、集會からの歸りに、其の宗教家と道づれになり、更に何か爲になる話を聞き得るだらうと期待したに拘らず、唯世間話ばかりして、一言も信仰上のこ

とに及ばないのに失望し、之につまづいて、終に全く基督教に遠ざかつたといふやうな例もある。警戒せねばならないことである。

これと反對の實例は、ブレングル中將が、まだ年若い頃の話であるが、毎晩續いて、或る會館での集會に出席し、それを終へると、夫人と打連れて家に歸らるゝ、其の途中で語り合ふことは、悉く人々の靈魂のことや、神の恵の話ばかりであつた。ところが近所の、或る病院に勤むる一人の看護婦があり、夜おそく務を終へて、宿に歸らうとして、往々ブレングル中將、及び夫人が集會を終へて歸らるると一緒にになり、後に隨いて歩きながら、聞くともなしに、二人の話し合はるる處を聞いて見ると、いつもいつも唯眞劍な信仰的話のみであるから、いづしか之に感化せられて、自分も眞面目な、熱心なる基督者となり、後には傳道に身を獻げ、故國アメリカを去つて、朝鮮までも出て來て、働くやうになつた、と聞いて居る。

此の如く人を集會に誘ふことは、これを基督に誘ふ大切な手段である。しかし人を集會に誘ふほどであるなら、折角其の集會の前後に注意し、聖き感化が、一切の事を通じて、徹底的に其の人々の上に及ぶやう、行届いた世話をすべき必要がある。

人を集會に誘ふことは、箇人傳道に最も大切な第二の手段である。

七 訪問せよ

「山が若しマホメットに來らば、マホメットが山に往かねばならぬ」と、いふことがある。未信者が若し道を求めて向ふから來ないなら、私共は此方から未信者に出かけて行つて、之に福音を宣傳せねばならぬ。是に於てか訪問傳道の必要を見るのである。聖書には基督がペテロの家を訪問し、ザアカイの家を訪問し、マリヤ、マルタの家を訪問し給うたのみならず、亦癩病人シモンの家をも訪問し、散々冷遇を受けながら、それでもそこに入り來つた一人の罪深き婦人を、救に導き給うたやうな實例がある。それ故私共は、訪問傳道に重きを置かねばならぬ。倫敦の或る貧民窟に、跛の一少年を訪問した宗教家がある。「御身は、基督を知つて居ますか」と、その少年に尋ねると、「ハイ知つて居ります」といふ。「誰に教へられてか」と問ふと、「この先の大な家で、度々演説する人から教へられて。」と

いふ返事であつた。段々問ひ質して見ると、「この先の大きな家」といふのは、國會議事堂のことで、又「たびたび演説する人」といふのは、グラッドストーンのことであると、解つた。グラッドストーンは、どうかしたわけで、此の哀れな跛の少年のことを知り、折々自分で花を持って來たり、又は食物を持って來たりなどして、之を慰問し、別れる前には聖書を讀んで、基督の話をして歸つたのである。グラッドストーンといへば、彼が大藏大臣を勤めた頃、その倫敦滞在中は、トラファルガル・スクエアの聖マルチン教會に出席して居つたが、その教區に一人の老いたる街路掃除夫があり、グラッドストーンは大道で彼にあふと、之に言をかけて居つたが、そのうち其の掃除夫が病氣に罹り、仕事に出られなくなつた時には、其の住所を探し出し、之を其の陋屋に見舞ひ、共に神に祈りなどして、慰藉してやつたといふ逸話がある。

米國第二十三代目の大統領たりし、ベンジャミン・ハリソンは、或日教會の役

員二人が、或る青年の事につき、「どうも彼の人には、道理上わからぬ處があるさうで、信仰に入り兼ねるのである」と、言うて居るのを聞き、翌晩その青年を下宿に訪問すると、主婦は驚き、彼を大な客室に案内した。けれどもハリソンは、「うちとけて話をするには、矢張居間で二人だけの方が、好ささうである」といひ、青年の部屋に入つて、懇ろに之に信仰上のことを語り、午後八時から午前二時まで、六時間を費し、循々として教を説いた結果、其の青年は悔改めて、終に立派な基督者となつたといふことである。

訪問といへば、救世軍の母ブリス夫人が、ゲーツヘッドに於ける貴き經驗の如きは、少いと思ふ。此は救世軍創立の前數年、夫人が恰も三十歳の頃のことであつた。或る日曜日の夕方、夫人はいつもの如く集會に出席しようとして、人口の稠密した、狭い通に差しかゝると、數多の男女がそこらを徘徊して居り、中には窓から首を出して、通りかかりの人々を、品評して居る若い婦人などもあつた。そ

れを見た時、忽ち夫人の胸に響いたのは、「自分ばかり集會に出て、結構な話を聞いて喜ぶよりも、寧ろ此うした望なく神なき人々に、信仰を語る方が、神の榮のためではないか」といふ御聲であつた。同時に、それは又、あんまり、あつかましい仕方ではあるまいかといふ疑も起つたが、更に考へて見れば、そこ迄踏み込んで盡瘁してこそ、始めて聖書に「強ひて人々を連れ來れ」とある御言を、實行する所以でもあらうかと、思ひ直し、心の中に神の御助を祈りつつ、取敢へず直ぐ向ふの石段に腰をかけて、饒舌つて居る一團の女たちに、信仰のことを話しかけると、皆案外靜に聞いて、中には今後集會に出席することを約束するものもあつた。

續いて更に、他の一團の女たちに基督のことを語りたる後、不圖氣がついて見ると、隣の家の前に、水差を手に持つた一婦人が立つて居る。酒に酔うて居るのではないかと思はれたが、かまはず傍に寄つて、「此の下の家は留守なのですか」

と問ふと、「集會に行つたのです」といふ。「あなたはなぜ、集會に行きませんか」と尋ねると、「私は宅に仕様のない、のんだくれの夫が居つて、世話が焼けるから、集會になんか出られません」とのことである。「其の方に面會させてくれませんか」と申入ると、「駄目です。屹度失禮なことを言ひますから」と答へた。「そんなことは、かまひません」と、強ひて彼女の後について、中に入ると、そこに四十歳そこそこの男が、ちびりちびり酒を飲んで居つた。之にルカ傳の放蕩息子の譬を讀んで聞かせ、其の悔改を促がすと、彼は涙を流してこれ迄の罪を悔い、やがて禁酒の誓約書に署名すべきことをも、約束した。夫人は此うした貴き訪問の經驗に勵みを得、爾來引續き同様の運動を試みた甲斐があり、最初の數週間に、早くも十箇の酒飲の家族を、基督に導くことが出來たのである。

しかし乍ら訪問は、いつも先方から快く迎へらるるものとは限らない。反つてしばしば居留守を使はれたり、又は玄關拂を食はされたりするやうな、冷たい待

遇を受けるものと、覺悟してかからねばならぬ。チャーマースは、或る頑固な罪人を二十一回訪問して、其の都度、見事に面會を謝絶せられた。それにも屈せず、更に二十二回目の訪問をすると、流石に強情な相手の男も終に我を折り、「兎も角も二十二回まで、俺に會ひに来る人の顔が見たい」と言ひ出し、之と面會した結果は、やがて導かれて、十字架の主しゆに歸依するに至つたさうである。

ジャック・ストーカーは、元酒飲の無頼漢であつたが、立派に救はれて、後救世軍の士官となり、中佐にまで進んだ。ストーカーが一大尉として、或る小隊に赴任した時、其の最初の集會にて、兵士たちに向ひ、「私は日ならず、諸君の家庭を残らず訪問します」といふと、一人の女兵士が「しかし私の宅にだけは來ないで下さい。夫は新しい士官が宅に來たら、蹴飛ばしてやるといつて待つて居り、近所の人たちは又、それを見物するのを楽しんで居る處ですから、どうか宅にはかりは來ないで下さい」といふことであつた。ストーカーはそれにも拘らず、翌日

その女兵士の家を訪問した。近所の人々の中には、早や何事か起るに相違ないと、窓から首を出して見て居るものも、少くなかつた。ストーカーは入口の所に、紅雀を入れた鳥籠があるのに目をとめ、戸が開いて内に入るや否や、「何といふ可愛い紅雀だらう」といひ、やがて「失禮、失禮、人の家に來て挨拶もしないで、小鳥のことを話すのは、失禮ですけれ共、實際此の紅雀は氣に入つたねエ」といふ調子で、しばらく小鳥の話をして、さつさと歸り去つた。其の夜女兵士が集會に出て來ての話によれば、彼女の夫は「今度の小隊長は話せる、此の次の日曜には、お茶に案内しよう」と言ひ出したさうで、ストーカーはそれから後、都合六回彼を訪問したが、いつも競馬や闘犬のことばかり話して、神のことも、基督の事も、一切口にしなかつた。しかし七回目の訪問に於て、彼は如何に基督が、彼を墮落のどん底から救ひ給うたかを語り、「君も同じ恵によつて、救はれたが宜しからう」と言うて、終に之を生命の源なる救主に導いたのであつた。

此の如く訪問傳道を有効ならしむる爲には、殊に靈魂に對する熱き愛と、氣轉と、忍耐と、根氣とを要する。カリフォルニア在住の日本人なる一救世軍人は、平生農業に従事して居るのであるが、どんな忙しい時にも、野良から歸ると、必ず毎日、近所の家を二軒宛訪問して、基督の證言を立てることに定め、既に數年間之を繼續して、餘程多數の人々を天の父に立歸らせて居る。私共も、どうか、さうした忍耐と、根氣と、熱誠とを以て、盛んに訪問傳道に盡したきものである。罪人を訪問することは、箇人傳道に最も大切な第三の手段である。

八 文書を用ゐよ

貧しい、名もない一人の婦人が、一部のトラクトを、リチャード・バックスタ一といふ青年に與へた處が、バックスタ一はそれを讀んで感動し、その時から、信仰に志したのみならず、後有力なる宗教家となり、「未信者に呼びかける」と題する一書を著した。そのバックスタ一の書を讀んで、基督に従ふ決心をした者が數多くある中に、フィリップ・ドッドリッチといふ人があり、これも後に宗教界に名ある學者となり、「靈魂に於ける宗教の興隆及び進歩」と題する一書を著した。そのドッドリッチの書を讀んで、神を信するに至つた者が數多かつた中に、ウイリアム・ウイルバーフオースといふ人物があり、此のウイルバーフオースは、英國に於ける奴隸廢止の驍將として、多大の貢獻をした人道の偉人である。彼は又「基督教の實際的見解」といふ一書を著したが、それを讀んで道に入りたる者も多

多ありたる中に、リー・リッチモンドといふ人があり、之が後に「牛乳屋の娘」と題するトラクトを著したが、それを讀んで又、十字架の贖罪に依頼むに至つた者が、更に幾百千人の多きに達したといはれて居る。即ちバックスターからドドリッチに、ドッドリッチからウイルバーフオースに、ウイルバーフオースからリッチモンドに至る迄、數代の間引續いて、無數の靈魂を神の國に導いた力ある活動は、貧しくて名もなき婦人が、一部のトラクトを青年に與へたのに原因すると思へば、此は文書傳道の效力の、いかに大なるかを語る、著しき事實といはねばならぬ。

救世軍隨一の元勳たる、ジョージ・スコット・レイルトン中將は、其の初、ブリス大將が書かれた「大衆傳道論」を讀んで感奮し、それから思ひ立つて、身を救世軍に投じたものである。ブリス・タッカー中將は、又、印度の裁判官であつた頃、英國から來た救世軍の機關新聞一枚を手にし、それにのせられた、ブリス

大將が預言者ナタンを論ずるの文を讀んで感激し、今の代に若しこんな精神で働いて居る團體があるなら、自分が身を許して、一生の勞苦を共にすべき人民は、此の人たちでなくてはならぬ」と。乃ち其の前途多望の好地位を繁履の如く抛ち、進んで救世軍の一士官となつたものである。

日本の救世軍に於ても、神が其の印刷物を用ゐて、人々を祝福し給うた例は、數へ切れない程多い。久しい以前、一人の青年が街頭にて、一部の「ときのこと」を買つて之を讀み、それから道を求めて救世軍人となり、後士官となつた。現に東京の大事な一小隊を受持たる、某少佐といふは、其の人である。同じく久しい以前、佛教の一僧侶が、偶然一枚の「ときのこと」を買つて讀んだのが本で、それから基督教に心を寄せ、終に改宗して某教會に入り、今日ではその派の有力なる牧師として、働いて居らるゝやうな實例もある。或人が事業に失敗し、又自分の身の修まらないのに失望し、上野の奥に入つて、首をつつて死なうと試みたが、

樹の枝に結んだ細帯がほどけた爲に果さず、ぼんやりして公園の入口まで來ると、忽ち救世軍の野戦に出あつた。そこで一部の「ときこのゑ」を求めて歸り、それを讀んだ結果、彼は新しい希望を見出したのである。早速最寄の小隊を訪ねて行つて、士官の導をうけ、爾來喜んで毎日の家業を勤むる、善良なる一市民となつた様なこともある。

模範的の救世軍下士官として、いつ迄も私共の間に記憶せらるべき、ドクトル脇屋正人氏は、亦其の初、一枚の「ときこのゑ」を讀んだのが本で救世軍を知り、其の軍人となつて、多年非常な忠誠を盡された人である。自分が「ときこのゑ」によつて導かれたのであるから、爾來一生涯「ときこのゑ」を用ゐて、他人に傳道することを忘れず、醫療の餘暇には、自分で戸毎に「ときこのゑ」を賣つて歩き、患者を往診する場合にも、往々「ときこのゑ」を靴の底に忍ばせてゆき、肉體の病の手當が終ると、そろそろ「ときこのゑ」を取出して、患者及びその家族に、

心の病の治療をすゝめらるゝやうなわけで、之によつて罪から救はれた人、信仰を引立てられた人等、數限りもない程、多かつたのである。

帝國大學教授、醫學博士某氏は、七ヶ月の月足らずの兒を設け、熟練なる二人の看護婦を添へて、兒供が母の胎内に居ると同じやうにして、之を育てられた甲斐があり、七歳までは大くなつたが、どうしても骨が軟くて、起つことも、座ることも思ふやうに出來ず、終に死亡したのである。其の間博士は言ふに言へない精神上の苦悶を経験せられたが、兒供が亡くなる頃には、幸に活きた天の父上を見出さるゝに至つたのである。いつぞや面會した時のお話に、「あなたの著された『基督教講話』を、二遍くり返して讀むうち、終に綴目が切れしました。しかし然らする間に、私は、『神は愛なり』といふ眞理を、發見したのであります」といふことであつた。

先頃カリフォルニアから歸つて來た一救世軍人は、以前はひどい酒飲であつた

が、救世軍發行の「禁酒のすゝめ」を読んで胸をうたれ、神を信仰して酒嫌となり、それ以來十年近く、禁酒と信仰との生活を營み、彼の地在留の多數同胞の中に、大なる榮光を顯して居るのであつた。

「平民之福音」が其の出版以來、三十餘年を経て、愈々盛んに人を基督に導く武器として用ゐられて居るのは、唯々感謝の至である。關東大震災の際、惜しい命を落された指田和郎中佐は、青年の時代に、寝ころんで「平民之福音」を読んでゆくうち、段々感ずる所あり、起き直つて居ずまゐを正し、之を読み續けて、自分の罪と又基督の救の眞理を發見し、其の場で神に祈り、やがて救世軍に來て兵士となり、後には士官となつて、あれほど成功ある、忠實なる奉仕をする人物となられたのである。「平民之福音」が出版になつた當座、福島縣の田舎から、道を求めて上京した一田舎紳士があり、神田錦町の或る下宿屋に一週間ほど滞在して、「平民之福音」を読み、其の書中に教へてある通の祈をして救を求め、之を見出

した結果、喜び勇んで其の郷里に歸り、他に誰一人の基督者も居ない田舎で、獨り救世軍人としての生活を續くるうち、推されて村長に選ばれたが、いつも赤シャツを着けて役場に通ひ、眞面目に其の務を行ふのを見て、村民は彼のことを「基督の村長」と呼ぶやうになつた。後家族を擧げて東京に出で、いろいろ苦勞して其の子らを教育せられた効果があらはれ、其の長女は今現に救世軍中佐某氏の夫人として令名あり、其の男子の一人は、現に日本に十人ばかりある聯隊長の中の一人として、好き働をしてゐるのである。

此の間も南米のブラジルから、一寸歸朝した某氏の話に、數年前、或日さる日本人の轉宅した後を片付にゆき、そこに落ちて居つた書物を取上げて見ると、これは半分にちぎれた「平民之福音」であつた。それを拾うてうちに持つて歸り、讀んでゆくうちに、信仰の筋途を發見し、之を其の弟に讀ませると、弟も同じく信仰に志すやうになつた。そこで大分距離のある地方に、一人の基督者なる學

校教師が居らるゝのを訪ねて行つて、尙もわからぬ所を教へてもらひ、そんなことから、到頭兄弟二人の家族が、残らず基督の救を受くることゝなつた。今度は又久し振りに兄の方だけ一寸歸朝し、郷里の熊本縣に歸り、實家の人たちに基督教の話をする、實家でも亦一家擧つて、同じ信仰の門出をすることゝなつた。つまり半分にちぎれた「平民之福音」が種となつて、今日迄既に三家族が福音をうけるゝに至つたのである。近頃も大阪の林歌子女史は言はれた、「私は年中、いろいろの出版物を用ゐて、文書傳道をしてゐますが、矢張「平民之福音」が第一等でありませう」と。

それにつけても、私共は心がけて、機を見ては文書傳道を試みたまきものである。普及版十錢の「平民之福音」一冊、又は定價五錢の「ときこのゑ」一部で、往々全世界にも換へられない、人一人の靈魂が救はるゝものとすれば、此はどんな分別をしても、人に讀ませたまきものではないか。況んや文書傳道は、必ずしも

無料で、こちらから出版物をくれることを要せず、反つて其の人々に代價を拂うて、それらの書類を買うて讀ませ、之を神の恩寵に連れ來ることさへ出来るのである。あれば、お互に今から機を捉へて、熱心に文書傳道の爲に盡したきものである。文書を用ゐて人を基督に導くことは、箇人傳道に最も大切なる第四の手段である。

九 膝詰て説け

「直諫は一番鎗よりも難し」と、昔の人は言うて居る。他人に面と向いて、其の罪を戒め、之が悔改を促すことは、軍に出て一番鎗の功名をするよりも困難だ、といふ意味である。殊に箇人が箇人を相手に之を試むる場合は、其の至難なることを覚えるのである。それにも拘らず、私共が若し箇人的に人々を戒め、其の罪を悔改めんことを忠告し得ないやうであれば、平生幾ら集會ばかり營んだかというて、または説教ばかりしたかというて、その罪人を神に立ち歸らす實際上の効果は、恐らく至つて少からう。それ故私共は、所謂膝詰傳道を重んぜねばならぬ。即ち箇人を相手に直接に福音を宣傳する運動を、重要視せねばならぬ。膝詰傳道の行はるゝ處には、他の種々なる傳道方法が、其のお蔭で、悉く活きて働くのである。しかし乍ら膝詰傳道を伴はない諸種の傳道は、概して其の收穫が

甚だ多くないものと見て、間違ないのである。

ダビデ王が、大なる罪を犯した時、預言者ナタンが、巧なる譬喩を以て彼の良心を喚び醒し、やがて單刀直入「罪人とは誰か、王よ汝は其の人であります」と直言したる如き、膝詰傳道の最も勇敢にして、且最も成功したるものといふことが出来よう。其の他基督が、一晚かゝつて、ニコデモ一人の爲に、新に生るべき大切な教義を教へ給うた如き、又は日中旅の疲勞を忘れて、サマリヤの女一人の爲に、活ける水の譬を説かれた如き、何れも膝詰傳道の絶好の模範を示すものといふべきであらう。

グラッドストーンは或時、其の女中の一人が、心配さうな顔をして居るのを認め、「どうしたわけか」と尋ねると、此は其の女中の忤が、放蕩の行をする爲に、苦勞して居るのだといふことが解つた。直に其の青年を呼びよせ、二人で數時間、一室に閉ぢてもつて之と語り、之に罪の懼るべきことを説き、之に基督の十字架の

有難いことなど話して聞かすと、青年は感奮して其の不心得を悔改め、爾來見ちがへるやうな人間になつたと、聞いて居る。グラッドストーンは、膝詰傳道の大切なことを辨へた基督者であつた。

大將ウイリアム・ブースが、膝詰傳道の勇者であつたのは、世間に隠れもない事實である。即ち彼は汽車でも、汽船でも、會館でも、客間でも、食堂でも、旅館のエレベーターの中でさへも、あらゆる機會を捉へて、あふほどの人々に救霊の大事を説いたものである。後にアスキス夫人となつた、その頃のマーゴット・テナント嬢が、或る驛にて發車間際に、あはただしく汽車にとびのると、そこに白髮童顔の一救世軍人が、祕書と覺しき一壯年を相手に、書類に目を通して居るのを見出した。不圖氣がついて見ると、そこには「貸切り」といふ札が貼つてあるので、驚いて、「此は失禮しました」というて、お詫をすると。老紳士は、「お詫には及びません、しかしあんな危険な眞似をして、怪我でもしたらどうしますか。

あなたは實際、そんなに迄して、急いで汽車にのる必要があつたのですか」といふ故、「私は乗馬を験しにゆくのです。それであなたは」と問返すと、「私は靈魂を救ひに出かける處です」といひ、それから段々と、靈魂の救の大切なことに語り及んで、さてはそこに跪いて、一緒に、神の恵を彼女の上にあらんことを祈つてくれた。此の老紳士といふのは、申す迄もなく、救世軍創立者ウイリアム・ブース大將其の人であつた。アスキス夫人が後、自叙傳を著すに當り、特に「ブース大將」といふ一章を設けて、當時のことを、詳細に記載したのは、其の感動を受くる所、甚だ深刻であつた爲に外ならない。南アフリカの豪傑セシルローズも、亦其の歸英の砌、救世軍の農業部を參觀に出かけ、そこにブース大將から靈魂の救はれねばならないことを語られて、非常に感心し、「私は未だ曾て大將の如き、道徳的勇氣に富んだ人を見たことがない」というて、感嘆したことがある。

二代目の大將ブラムエル・ブースも亦、其の父に譲らない、膝詰傳道の熱心家

であつた。彼が日本に來朝した際、或る紳士が彼を訪ね、日本の救世軍に就いてひいき分な話か、何かしかけられると、大將は直に話題を轉じ、「それにしても、あなたの靈魂は救はれて居りますか」と問ひかけられた。其の紳士が後に言はれるには、「ブース大將は眞の宗教家である。自分の有する或物を、他人に分たん爲に熱中する所の聖者である」とのことであつた。其の東京養育院を參觀せられた時の如きも、早や次の集會に出席すべき時間が切迫して、せかせかして居られたにも拘らず、案内の勞をとられた澁澤子にむかひ「ちよつと、あなたにだけ、お目にかゝりたいのですが」というて、一室に入り、人拂をしてもらうて、懇ろに其の神の心に適ふ生活を營まれんことを、勧誘せられたのであつた。彼は眞實に人の靈魂を思うて、その爲に盡す人物であつた。

それにも拘らず、基督者が兎角、膝詰傳道を輕んずるものであるから、或る神學校の小使が、多年基督に救はれたいと熱望しながら、導いてくれる人がないの

に苦しんだ、といふやうな話さへ出て來るのである。しかしながら、膝詰傳道は思ひ切つてやつて見れば、案外「待つて居ました」とばかり喜んで、其の言ふ所を受入る人々が、決して少くないのである。ペンテコスト博士が、或時だしぬけに、或人に信仰の事をすゝめ、「まことに御無禮しました」というて、挨拶すると、其の人はそれを遮りとゞめ、反つて涙ながらに感謝して言うた。「どう致しまして、私は去二十年間、誰か私に救のことに就いて、話してくれればよいにと、待つて居りましたが、ついぞ其の人に出あひませんでした。それを今日始めてあなたから、そのお話を伺ふことが出來て、ただもう感謝に堪へません。しかしそんな人は私一人だけでなく、他にも多くあることかと思ひますから、折角さういふ人々の爲に、御盡力を願ひたいものであります」と。

米國の或る教會では、最近一年間、一人の新しい信者も出來ないので、牧師は甚くその責任を感じ、或夜役員會を開き、其の場で辭職を申出た。それを聞いて

役員らは驚き、中には「新しい信者は出来ずとも、既に信者になつて居るものは、愈々信仰に進んでをるから、さう心配したものではありません」などいうて、之を慰むる者もあつたが、牧師は承知しなかつた。「若し信者が本當に信仰に進んで居るなら、其の結果として、彼等は他人の救の爲に努力すべく、自然、新しい信者が、相當に殖えて來なければならぬ筈であります」と、牧師は主張するのであつた。それにも拘らず、役員らは強ひて彼の留任を懇請し、それにしても教會の現狀を、どう轉回したものと、相談し始めると。牧師は役員の中、最も古顔の一人に向ひ、「教會のことも教會のことですけれど、一體あなたは近頃、誰か罪人を救主に導いたことがありますか」と問はれて、役員は頭をかきながら、「お恥かしいことだが、私は誰も導いたことはありません」と答へた。他の役員に同じ問をかけると、何れも似たやうな返事をする者ばかりであつた。「そんなことなら、私だけでなく、諸君も残らず、役員を辭職せられねばならんのではないか」と、

牧師の眞實なる言に、誰も逆らひ得るものとはなく、乃ち一緒に跪いて神に祈り、お互の怠慢をお詫申上げたのである。

此は土曜日の夜のことであつたが、次の週の月曜日の朝、役員の一人は其の事務所に出ると、先づ番頭を呼んで言うた。「君が此の店に來て働き出してから、何年になるかね。」「十五年になります。」「その十五年來、私は君と同じ店に働いて、君が基督者でないことを承知しながら、ただの一度も、其の悔改を促さなかつたのは、神に對しても、君に對しても、實に申譯ないことである。どうか私の怠慢と不眞實とを赦してもらひたい。而して君に、これから一つ、本當の基督者になつてもらひたいのであるが」と、涙ながらに語り出でると、番頭は喜んで其の忠告にしたがひ、以來眞面目に、信仰の道を辿るべきことを約束した。かくて一人又一人と、同じ筆法で、他の店員を勧誘した結果、其の週の中に、新に十人の基督を信ずる者が起つた。別に他の役員にて、之と同じやうな努力を試みた者が

あつて、次の日曜までには、計三十人の新に基督信者となるものが出来、最早牧師も、役員も、辭職の相談などする必要がなくなつたといふことである。膝詰傳道くらゐ有効で、又他のあらゆる傳道方法の届かない所を補ふ、有力な戰術といふはないのである。

膝詰で人に信仰を勧むることは、箇人傳道に最も大切な第五の手段である。

一〇 執成の祈(上)

耶穌はペテロにむかひ、「シモン、シモン、視よ、サタン汝等を麥の如く、ふるはんとて請ひ得たり。されど我汝の爲に其の信仰の失せぬやうに祈りたり。」と仰せられた。此は彼がペテロの爲に、執成の祈をなされたことを示すものである。彼は十字架の上から、七たび語を發し給うたが、其の最初の語は、罪人に對する執成の祈であつた。「父よ、彼等を赦し給へ、其の爲す所を知らざればなり」と。其の言の未だ終らざるに、彼と並べて十字架にかけられた二人の賊の一人は、悔改めて、「耶穌よ、御國に入り給ふ時、我を憶え給へ」と願うた。かくて彼の息絶え給うた時には、刑の執行を監督して居つた百卒長が、胸をうち、「實に彼は神の子なりき」というて、信仰の志を起したといふのは、如何に彼の祈の應驗の著しかりしかを知るべき事實であつた。それ故私共も、彼の模範に倣うて、亦執成

の祈をつとめねばならぬ。執成の祈をするのは、最も基督的の事である。なぜかといふに、彼は其の肉體に在しし時、斷えず執成の祈をなし給うたのみならず、今も現に神の右に在つて、私共の爲に執成して居給ふからである。ヘブル書の記者が、「彼は己に頼りて、神に來る者の爲に執成をなさんとて、常に生れば、之を全く救ひ得給ふなり」というたのは、その事である。

耶蘇の祈の模範として遺し給うた所謂「主の祈」を見るに、其の僅か數行の短い文句の中に、「我等」といふ字が六つある。即ち「天に在す我が父よ」ではなくて、「我等の父よ」である。「我が日用の糧を今日も與へ給へ」ではなくて、「我等の日用の糧を今日も與へ給へ」である。「我に負債ある者を云々」ではなくて、「我等に負債ある者を云々」である。「我を試煉に遇せず」ではなくて、「我等を試煉に遇せず」である。かくて「主の祈」は、私共が自分自身の爲に恩恵を祈るのみならず、亦他人の爲に、その祝福を求むべきことを教へて居るのである。此は箇人

の爲の祈ではなくて、他人の爲の執成の祈である。しかも耶蘇が此うした執成の祈を、祈の模範として後世にのこし給うた處に、深き思召のあることを知らねばならぬ。それ故私共は唯神に祈るばかりでなく、殊に執成の祈をつとむる基督者でありたきものである。

ジョン・ハイドは「祈のハイド」と呼ばるゝ位、祈に力のある人であつた。「ハイドが話をしかけた罪人で、救はれない者はない」といふのが、彼を知る者の間の評判であつた。彼はどうして、そんなに迄、祈に力ある人となつたであらうか。其の由來に就いて、彼は次の如く物語つて居る。

「私の父の友人に、外國傳道に出たいと望みながら、境遇上、それが出来なかつた人があり、私が始めて印度へ傳道に出かける時、丁寧な手紙をしたためて私の許に贈つてくれた。私は紐育を立つ間際にそれを受取り、船が港を出ると、開封して讀んだのであるが、其の中に、「愛するジョンよ、私は君が聖靈にて満さ

る、迄は、君の爲に祈ることを止めないであらう」といふことが書いてあつた。して見れば、彼は私がまだ、聖靈のバプテスマを受けないと思つてをるのだ。又は私を心靈上に深い経験のない、未熟な若者であると、見くびつて居るのだなと、かく感じたものであるから、私は思はず、その手紙を床の上になげつけた。而してしばらくの間、甚だ不愉快に覺えたのであるが、しかし復考へ直して見れば、彼は極めて篤信なる老紳士である。もとより輕薄な思付から、此の手紙を認めたのではなく、反つて眞實の籠れる親切を以て、之を書いたものに相違ない。のみならず、私自身としても、果してどれだけ、神の愛と基督の救の力とを體驗して居るか。又どれほど外國宣教師として、眞に異教國民を教ふる資格を有するか。考へて見れば甚だ物足りない處のみ多い。して見れば、これは高慢な心から、癩癩など起して居るべき場合でなく、寧ろ此の手紙をくれた人の親切を感佩し、一緒に、改めて、聖靈にて滿されんことを神に祈るべき筈であらう、といふことに

氣がついた。そこで一遍床に投げ棄てた手紙を拾ひ上げ、之を再讀三讀して、いよいよ自分が、實際聖靈にて滿されねばならない必要を感ずるやうになつた。」

ハイドが印度に到着して後間もなく、彼は或る宣教師に連れられて、其の野外集會に列つた。宣教師は、基督が人を全く罪から救ふ救主である、といふ意味の話をしたのであるが、直ぐ其の後で、英語に巧なる一印度人が、「若し貴君の話が本當なら、貴君は其の全き救を、現にその身に經驗してゐますか」と尋ねるのを聞いて、ハイドは甚く心を驚かした。「あの問を若し私にかけられたとしたら、私には然りと答ふことが出来ないではないか」と。急ぎ宿所に歸り、今一度自分を反省した。而して神に祈つたのである。「私を全く潔め給へ、私に凡ての罪に打勝つ力を與へ給へ。殊にこればかりはといふ、私のすき好める、或る罪惡に打勝つことを得させ給へ。さもなければ私が印度に留まることは無用であります。私は米國に引揚げた方がましだと思ひます。私を潔めて、あなたを異邦人の間に證する

に足るものとならせ給へ」と。其の祈の聽かれた結果は、印度に成功ある一宣教師、ハイドを見出したのみならず、亦「祈のハイド」として知らるゝ、有力な神の僕を見出すに至つたのである。しかも此等凡ての事の奥に、彼が聖靈にて満さるゝ迄は、祈つて止まないと誓うた一老信者の、執成の祈のあつたことを思へば、貴きものは「正しき人の祈」である。

執成の祈は、殊に罪人の救の爲に最も緊要である。米國のスプリングフィールドに、一人の病める婦人があり、十七年間、寝たまゝ動けない中を、それにも拘らず熱心に祈を勤め、之に由つて神の榮を顯さんことを心がけた。初の間は、唯漠然と、罪人の救の爲に祈つて居つたが、後に思ひ當る所あり、其の相識れる未信者五十七人の名を書いて、其の爲に毎日三度づつ祈り出した。のみならずあらゆる機會を捉へて、其の中の或人には自分で手紙を出し、或人には信者の友人にたのんで、手紙を出してもらひなどして、盡力した甲斐があり、幾程もなく五十七

人が、悉く悔改めて信仰に入つたさうである。

或時基督者なる一青年が、牧師にむかひ、「何か私に相當の務を與へて下さい」といふと、牧師は「君に親しい友人がありますか」と尋ねた。「あります」と答へると、「其の人は基督者ですか」と問返した。青「さうではありません、以前の私と同じ事で、全く宗教に無關心であります。」牧「其の人に傳道して、之を導くことを、あなたの務としたら可いでせう。」青「それは駄目です。私には逆も出来ません。其の他に何か相當の務があるなら授けて下さい。」牧「それではあなたは、二つの事を心懸けたが可いでせう。第一其の友人に、直接信仰上の話はしない事。第二、けれども其の友人の救の爲に、毎日二回宛、屹度熱心に祈る事、どうです。」青「それは出来ることであります。一つやつて見ませう。」というて、青年は去つたが、二週間たない中に、彼は今一度牧師を訪ねて來た。而して言ふには、「どうかあの第一の約束を取消して、友人に基督の話をすることを許して下さい。私は彼が

神を知らずして、滅亡の道に行くのを、見て居ることが出来なくなりました」と、
 いうたさうである。此の如く基督者に傳道心が足りないのは、罪人の爲に、執成
 の祈をすることが足りないからである。罪人の爲に執成の祈をする人は、傳道心
 が自ら裏に燃えて来て、自然に又成功ある傳道をなすに至るものである。

イザヤ書に「エホバは人なきを見、中保なきを怪み給へり。」といふことがある。
 神は天から人間の世界を見渡して、眞面目な基督者が少いのを怪み、とりわけ執
 成の祈をする人物、神と人との間に立つて、罪人を神に歸らす爲に盡す人物の、
 餘りに少いことを、いぶかしく思うて居給ふのである。どういふ恐れ多いことであ
 らう。讀者諸君、私共は其の中保者としての務を行うて居るであらうか。私
 共は罪人の救の爲に執成の祈をして居るであらうか。神が私共を助けて、熱誠
 眞實なる執成の祈をする者とならせ給はんことを、願ふのである。

一一 執成の祈(下)

先頃ハイルシヤム子爵は、英國聖書會社の第二百二十四回總會に臨み、其の會
 社だけで、去一年の間に、一千二百萬部の聖書を頒布した盛況を述べ、それにも
 拘らず、一方には露西亞の如き反宗教國のあることを語り、然る後言うたのであ
 る。「私共は如何して、かゝる宗教の反對者に對抗すべきか。それには三つのも
 のが大切である。第一は祈禱、第二は模範、第三は聖書である」と。

此は唯英國に於て然うであるのみならず、我が日本に於ても同様である。私
 共が神を信ずる徒として、今の時代に爲し得べきことが多々ある中にも、殊に最
 も必要なるは、國民の救の爲に祈ることである。又銘々眞の基督者たる模範を示
 すことである。聖書の眞理を津々浦々に迄も、宣傳することである。何となれば
 我が同胞は、基督なしには、其の心を安んじ得ないからである。又愛なしには、

眞の幸福を享受すべき道がないからである。

取分け私共は、我が同胞の救を、熱心に祈り求めねばならぬ。

教會は、血汐と、祈とを以て、全世界を改宗せしめる。(ルーテル)

祈によつて、世の人が夢想するよりも、多くのことが行はれて居る。(テニソン)

祈なしには宗教があり得ないことは、猶言語なしには詩歌なく、空氣なしに

は音樂なきがごとくである。(マルチノー)

などというてある。ヤコブ書には又、「正しき人の祈は働きて大なる力あり」とあり、此の語を書きのこしたヤコブは、彼自身祈の人であつた。即ち彼はいつもいづも、ひまさへあれば跪いて、神に祈つた爲に、その膝頭が駱駝の皮の如く、硬くなつて居つたと、いはれて居る。初代の基督者は、非常なる反對と迫害との中に身を置きながら、能く「單純なる祈と、神の助とによつて」之に打勝つたのである。それ故私共も亦、眞實なる祈を以て、神の御力を呼び下し、之によつて

我が同胞を一切の罪と禍とより、救ひ出さん爲に戦はねばならぬ。

ジョン・ノックスは祈の人であつた。彼が「我に蘇格蘭を興へよ、しからざれば死を興へよ」と祈る時、其の大反對者メリー女皇は戦慄して、「ノックスの祈は、一師團の兵よりも恐ろしい」と、いうて居つたのである。私は先年エデンバラ市に行つた時、そこに「ノックスの家」といふのが保存してあると聞き、之を見物に出かけた。三階建の家の下階は古本屋になつて居て、其の二階と三階とは、ノックスの肖像だの、手蹟だの、其の他記念品など、飾つてあつたが、別に表二階の處に、ノックスの祈の部屋があるといふから、行つて見ると、長さ二間ばかり、幅は僅か三四尺の細長い一室に、粗末な椅子一脚を置いてあり、それでも寒國のことであるから、壁にストーブが切り込んであるのに、目がとまつた。ブース大將(サイリアム)の言に「足が冷くは悔改め難く、齒痛を患ひながら救を求むることは困難だ」といふことがあり。ノックスは寒い時には暖房の設備をして、足

が冷いとか、頭がひえるとかいふ憂なしに、神に祈つて居つたのであらうなど、想像しながら、此の思ひ出多き一室を去り兼ねたのであつた。

ヤルチン・ルーテルは、いつも聖書の約束を頼りに神に祈り、折々は「ここにあなたの御言があります。之を實行して下さらば、あなたの御信用を如何致しますか」といふやうなことを、言うて居つた。或夜反對者から遣された一人の間牒が、彼の宿れる部屋と向きあうた所に忍び、様子を窺うて居ると、彼は其の夜少しも眠らず、しきりに神に祈つて居るのを見て、間牒は歸つて報告したのである。「あんなに祈をする人には、かち得る見込がない」と。ジョージ・ホイットフィールドは又祈の人であつた。彼はしばしば神に對うて訴へた。「我に靈魂を與へ給へ、しからざれば我が靈魂をとり給へ」と。しかも其の祈は聽かれて、幾十萬人は彼を通じて罪より救はれ、基督に従ふ者となつたのである。

フィンニーの書いたものに、曾て十四年間、毎年冬向になるとリバイバルの起

る教會があり、其の都度多數の罪人が神に歸つて居つた。然るに十四年目に、一度起りかゝつたりバイバルが、途中で火の消えたやうに、やまつてしまひ、其の原因が解らないで居ると、或日一人の老信者が集會の中に起ち上つて言うた。「私は去十四年間、毎土曜日の宵から夜半まで、神に祈つて居りましたが、神は足りない者の祈に應へ、引續き毎年リバイバルを起して居給うた。しかるに二三週前から、どうかした拍子で、私は其の土曜の夜の祈を止めました處、恐ろしいことには、折角起りかゝつたりバイバルも亦、やまつてしまひました。私は今更のやうに悔恨に堪へません」と。かくして神は名もなき一老信者の祈に應へ、十四年間引續き、其の地にリバイバルを與へて居給うたことが、解つたのである。

紐育の西部に住む一病人があり、日々其の知つて居る宗教家、及び彼等の受持地區の爲に祈つて居つたが、あとでしらべて見たら、大抵其の祈をした順序で、各地にリバイバルが起つて居るのを、見出したといふことである。米國のホリヨ

一クに女子大學を起したメリー・ライオン女史の存命中は、毎年其の學校にリバイバルが起り、多くの青年女子が信仰に入つて居り、其の理由が明白でなかつたが、後に至り、此は女史が其の都度、非常の熱心と忍耐とを以て、神に祈つて居つた結果であることが、解つたさうである。

市俄古の大火の後、ムーデーは英國に再度の渡航をした。此は主として其の國の聖書に明るい人々から、教を受けん爲であつたが、行つて間もなく、北倫敦の或る教會から日曜日の説教をたのまれ、出かけた處が、朝の集會には一向力が入らず、まるで空をうつやうな感じがした。それにも拘らず、夜の集會になると、不思議に靈的の空氣がその場に充滿し、會の終に「これから決心して、基督に従ひたいと思ふ人は、お立ちなさい」と言ふと、數百人が一度に立ち上つた。そんなに多數の決心者が現れたことは、ムーデーも、初度であつたから、此は何ぞの間違ではないかと思ひ、念の爲に今一度、「これから決心して、基督に従ひたいと

思ふ人は、別室にお出なさい」と言ふと、また候數百人が一齊に隣室に入り來つた。そこでムーデーは彼等に種々話をした後で、「扱、いよいよ、今夜から決心して、基督に従ひたいと思ふ人は、明晩今一度來て、この牧師にお會ひなさい」と言ひおき、月曜の日には愛蘭に旅行したが、火曜日の朝倫敦から來た電報によれば「月曜の夜は、日曜よりも多くの回心者が集ひ來つた。どうか急ぎ歸つて、彼等を教導しておもらひ申したい」とのことであるから、ムーデーは急ぎ倫敦に立ち歸り、それから十日間、引續き集會を催した甲斐があり、目に見えて四百人の新しき信者を造り出すことが出來た。

然らば此の不思議なる、北倫敦のリバイバルは、どうして起つたかといふに、こゝに其の教會に屬する二人の姉妹があり、妹の方は病氣で動けないけれども、病床に在つて頻りにリバイバルを祈つて居ると、或時米國にムーデーといふ、力ある傳道者が現れたといふ話を聞き、どうか一度其のムーデーをこの地に遣し、

リバイバルを起させ給へと祈つて居る處へ、或る日曜日の朝、忽ち姉が禮拜から歸つて、ムーデーが其の教會に來たと話すのを聞き、是全く祈の應驗に相違あるまいと思ひ、それから直に斷食祈禱に取りかかり、半日餘り、必死に神に祈つた結果は、前にいふ如く、肝心なムーデーも不思議でたまらないほどの、大リバイバルが始まり、新に四百人の信者を加ふるに至つたものである。

それ故私共は、何が出來ないでも、罪人の爲に、其の救を祈ることが出来る。他人の爲に執成の祈をすることは、箇人傳道に最も大切な第六の手段である。

一二 品性の感化

或人が、門に電氣ベルを取りつけた處が、大層具合好く鳴るのを見て、満足に覺えて居つた。其のうち、家のどこかに今一つ、電燈をつける必要を生じ、取敢ず前のベルの電池を利用して、電燈をつけて見たが、一向火がともらない。不思議に思つて居る處へ、電氣會社の技手が來たので、「ベルはあれほど、よく鳴つて居つたに、同じ電池を用ゐてつけた電燈が、些ともともらないのは、どういふわけでせう」と尋ねると。技手は答へて「それはベルが音を立てるよりも、電燈の照す方が、數倍の電力を要する故、同じ電力を用ゐたのでは、火が點らないのが當然であります」と、いうたさうである。今私共が言語を以て神の恵を語るのは、猶ベルが音を立てる如く、又身の行を以て基督を證するのは、電燈が光を照すのと似た所がある。然るに光を照すには音を立てるよりも、數倍の電力を要す

るといふ話の如く、私共が身を以て基督を證するのは、口で神の恵を語るよりも、更に幾倍の靈の力を要する。それにも拘らず、私共が若し眞の基督者であり、又眞の救世軍人であるなら、私共はたゞ言語を以て福音を傳ふるのみならず、同時に其の日頃の行動、生活、人格等によつて、斷えず基督を世に證して居るやうでなくてはならぬ。基督も「汝等の光を人の前に輝かせ。是人の汝等が善き行を見て、天に在す汝等の父を崇めん爲なり」と、仰せられて居るのである。

モルガン博士は、或時救世軍の音樂會に出席して、次の如き話をせられた。一人の少女が罪から潔められ、神と偕なる生活に入りて、その嬉しさに堪えず、何とかして、同じ大なる恵を他人にも頒ちたいものと考へながら、ヨーク驛のプラットホームを歩いて居ると、そこへ蘇格蘭の方から來た汽車が入つた。その停車中、一等車にのつて居つた一貴婦人が、プラットホームを歩いて居る、如何にも樂しさを顔した彼の少女に目をとめ、之に聲をかけて「あなたははどうして、その

様に、喜ばしい顔をして居ますか」と尋ねると、少女は答へて「心から幸福に感じて居ます故」というた。「どうしてそのやうに、幸福に感じて居ますか」と問ふと、「耶穌基督が私を、幸福にして下さいましたのです」といふ返事であつた。「も少し精しく、其のお話を聞かせてもらへませうか。」「喜んでお話し申上げます」といふやうなことで、貴婦人は急ぎホイイを呼んで、その荷物をおろさせ、自分にもさつさと下車して、驛の待合室に入り、そこに少女からしばらくの間、その献身と聖潔との經驗を聞き、そこに跪いて共に神に祈り、同じ上よりの恵を求むることゝなつた。彼女は貴族の夫人にて、後に自分で其の當時のことを、モルガン博士に物語つたのださうである。即ち此の一少女の幸福なる笑顔は、神に祝福せられて、能く一人の靈魂を、基督に來らしむる爲の道標となつたものである。リビングストンが、アフリカの黒人を救はん爲に、大陸の奥地に入つてゆき、長らく消息が打絶えて、其の生死のほども案ぜられた時、米國の紐育ヘラルド

社は、一大探險隊を組織し、彼の行衛を搜索せしむることとなつた。其の隊長に選ばれたのは、ヘンリー・エム・スタンレーといふ豪膽不敵の快男兒であつた。スタンレーは數十人の土人を雇入れ、莫大な荷物食料品等を携へ、深山を越え、大澤を涉り、疫癘に悩まされ、炎熱に苦しめられつゝ、非常な苦難を凌いだ後に、到頭リビングストンにめぐり合ふたのであるが、それと同時に彼はリビングストンの、斯る不健康な、未開の地に、眞に黒人の靈魂を愛する心から働いて居る、犠牲獻身の態度に胸をうたれ、そこを去る前に、謙遜して己が罪を悔改め、基督を救主と崇むるものとなつたのである。即ち彼は言うた。「私がリビングストンを見出した時、彼は眞の基督教宣教師として、病弱な體で、旅行して居る處であつた。彼は私に對して、一言も基督者になれと勧めなかつた。彼の談話や、又は説教ではない。唯リビングストン其のものが、私を基督に獲たのである。私が彼と出あつた時、私は基督者ではなかつた。しかし彼と相見て幾許ならざるに、私

はリビングストンの神を拜み、彼の救主に信賴し、彼の聖書を愛讀するに至つたのである」と。即ちリビングストンの活ける人格、品性其のものが、スタンレーを基督に導いたことを察するに足るのである。

ライオン齒磨の第一世小林富次郎氏が、如何に基督教に心を寄するに至られたかといふことにつき、其の傳記に次の如く記してある。

「明治二十一年の事であつた。小林氏が神戸の播摩方に在勤中、一夕數友と共に市中を散歩した。不圖一劇場の前に來かゝると、其の前に耶蘇退治駁邪演説と廣告してあるので、面白半分て友達と共に劇場を覗いて見た。ところが多少名高い佛教の僧侶達が、代る代る演壇に立ちて辯ずる所、餘りに淺薄で不眞面目であるので、小林氏は嫌になつて出てしまつた。しかるに其の後二三日たつてから、同じ劇場で、基督教の演説があるといふ廣告を見た。之は定めし面白からう。耶蘇教信者が今度は佛教の攻撃をするのであらうから、こいつは一番聞き物であると

考へ、又友人を誘うてその劇場に行つて見たところが、案に相違して、聴衆の様子が、前の演説會とはがらりと變り、演壇に立つ所の人も至極謙遜で、眞面目で、しかも其の説く所、條理整然たるものがあるので、小林氏は一々自分の胸に徹底する様に感ぜられた。之は大分品が違ふと考へ、心竊かに感服した。然るに何たる不都合ぞや、劇場の一方の棧敷に、數人の僧侶らしき若者が居つて、頻りに辯士の演説を妨害して居る。餘りに八釜しく罵詈雑言するので、小林氏は些と腹を立て、聞いてから反對したらよささうなものだ、聞きもせず妨害するのは卑怯ではないかと、心中に憤つてゐた。僧侶は益々妨害を續けるので、場内騒然たる有様であつたが、其の時樂屋の方から、一人の大男が舞臺に現れて、花道から棧敷の方に歩いて行つた。聴衆の中でかういふ聲が聞える。あの男が出れば大丈夫だ。あれはもと柔術の師匠で、今町内の夜番をして居るが、熱心な耶蘇教信者であるから、坊主の三人や五人は、造作もなく掴み出すに相違ない。之は一番見物

だぞといふのであつた。小林氏も小氣味よく感じて、棧敷の方を見て居ると、豈圖らんや、件の大男は頻りに中腰になつて、何かあやまつて居る様子である。覺えのある腕で、さつさと外に掴み出す所か、反對に頭を下げて、どうぞ靜肅にするやうにと、頻りに頼んで居るのである。之を見て小林氏は非常に感動した。成程耶蘇教はえらい教である。驚くべき力を有つて居る宗教であると悟つた。此の時の辯士は誰であつたか、又其の演説はどうであつたか、小林氏は判然記憶して居らぬが、唯此の柔和なる勇者の態度に感服して、こゝに生涯忘るべからざる深き印象を受けたのである。小林氏は演説が終ると、早速其の旨を會主に通じて、求道の志を告げた云々。

使徒パウロは、コリントの信者たちに告げて、「汝等は明かに、我等の職によりて書かれたる基督の書なり」というた。其の如く私共、基督の僕は、銘々活きた一巻の聖書である。活字で印刷した聖書は讀まない人たちも、活きた人間とい

よ聖書は讀むのである。私共「基督者だ、救世軍人だ」と名乗る者の品性、行動を、案外注意して讀み、時としては、蚤取眼で之を讀み、それが私共の平生告白する所と一致するなら、降参して基督の前に頭を下げる。けれども若し私共の品性、行動が、その平生告白する所と不一致であることを見出すなら、私共を認めて偽善者となし、虚言者とする位はまだしも、果は神をも、基督をも、虚偽者と断定しようとするのである。どういふ恐ろしいことであらう。それ故私共は不斷から心がけて、其の告白する所が、實生活と一致する人物となつて居らねばならぬ。マシュー・ヘンリーは、マタイ傳第五章「山の上の説教」の始に「耶蘇口を開き、教へて言ひ給ふ云々」とあるのを釋いて、「此の時は耶蘇が口を開いて人々を教へ給うたが、平生は口を開かずして教へて居給うたのである」というた。私共も亦どうか、たまさか口を開いた時にのみ、人を教へるのでなく、平生口を開かない時にも、斷えず身を以て基督の活きた證を立て、居るやうな、生

活を營みたまきものである。

品性の感化を通じて人を救に導くことは、箇人傳道の第七の要件である。

ロシア文學で有名な某氏が死なれた後、其の夫人は非常に力を落し、家にばかりたれこめて居られたが、そこへ或人の世話で、一人の女中がやつて参つた。まだ年若いにも似ず、いかにも親切で、主人思ひで、夫人の身の上を心から同情し、しんみに盡してくれるので、夫人は大層喜び、またなきものとして信頼して居られたが、只一つ、日を経るうちに氣付いたことは、彼女が折々、御用のすきまを見ては、部屋の隅の方にゆき、屈んで何か、くしよくしよいうて居ることである。「あれは何をして居るのか」と、或日夫人は女中に尋ねられると、答へて、「あれは眞の神様にお祈りをして居るのであります。私は救世軍であります。あなたも眞の神様を御信仰になりますなら、屹度これまでとちがうて、はればれした御生活が出来るに相違ありません。それには好い書物がありますから、一度讀んで御覽なさいまし」といって、行李の中から、『平民之福音』一部を取出して、貸してくれた。夫人は其の『平民之福音』を讀んで、基督教の信仰に入り、爾來新しき希望に生くる人となられた。此の女中は後救世軍の士官となり、數ヶ所の小隊を受持ち、成功ある救靈の奉仕をしたのであるが、不幸にして早く世を去つたのは、惜いことであつた。

二三 救靈の祝福

基督の御言に「悔改むるひとりの罪人の爲には、悔改の必要な九十九の正しき者にも勝りて、天に喜あるべし。」又「悔改むる一人の罪人の爲に、神の使たちの前に喜あるべし。」とあり、使徒ヨハネは「我には我が子等の、眞理に循ひて歩むことを聞くより、大なる喜はなし」と、いうて居る。何れも共に、救靈の喜の如何に大なるかを語られたものである。

或人の言に、「私は、しばしば自分の靈魂がいぢけて、ザアカイの如く一寸法師になつたやうに覺える。かゝる場合に、私はいつでも箇人傳道といふ桑の木に登つて、耶蘇を拜むのであるが、耶蘇は其の都度、『我今日汝の家に宿らん』と宣ひ、來つて私と偕に住み給ふのである」と、いうてある。此の如く救靈の運動、殊に箇人傳道くらゐ、之に従事する者を祝福して、著しく恩恵の中に成長進歩せしむ

るものはない。私共は他人の救の爲に働くことによつて、己が救を全うするのである。又他人を基督に導くことによつて、自ら基督と合致するのである。然るを若し自分勝手なことのみに考へ、自分さへ救はるれば、他人はどうなつても可いやうに思ふ者は、聖書にある放蕩息子の兄の仲間である。其の兄弟の氣の毒な狀に同情すること能はず、又天の父の御胸の中を察することの出来ない、不人情無慈悲な人間と言はねばならない。福音の唱歌者として有名な、チャールズ・アレキサンダーは言うて居る。「箇人傳道をしないものは、其の生活に於て、罪を犯して居るのである。諸君が説教者であると、教師であると、母であると、父であるとを問はず、若し定まつた時間を用ゐ、定まつた人々を相手に、之を確實なる救主に連れ來るべく努力してゐないなら、諸君は其の生活に於て、罪を犯して居るのである」と。

或は箇人傳道の、しづらいことを歎息するものがある。さういふ人々に對して、

ツラムバルは忠告して言うた。「箇人傳道は、假令初のうち失敗して、あとで改めても、絶えて之を試みないに勝ること、萬々である。ひとりびとりの靈魂を基督に連れ来る運動は、どんな大間違をしても、本氣で之を勤めなほどの大間違に陥ることは、斷じてない。多くの人々は、いたづらに失敗を恐れて、終に何の善事をもなし得ないのである。しかし乍ら何もしないのは、其の實、最大の悪事を^{おこな}行^なうて居るのである。『此等のいと小さな者の一人になさざりしは、即ち我になさざりしなり』との理由によつて、詛はれたる者共は、大なる審判の日に、永久の火に投げ入れらるゝと、いふではないか」と。けれども靈魂の救の爲に小き骨折でもして居る者は、やがて遙に大なる、有效の奉仕をなし得るに至るものである。スボルジョンは、近世の最も偉大なる説教者であつたが、それでも其の當初の經驗を語つて、次の如く言うて居る。「今も憶えてゐるのは、私が始めて耶蘇を知つた頃、其の大なる恩恵に感激し、多少でも之を他人に紹介したいと、心には願へ

ども、儲、いかに之を實行すべきかを知らず、もとより自分のやうな者が、人の前に立つて演説説教など出来ようとは思はず、又臆病にして、人にむかうて宗教の事を對談する勇氣もなく、如何ともし得ない故、私は短い手紙を書き、それにトクラトを添へて、家々の郵便受函に入れたり、又は中庭に落したりして、神がそれらを祝福し、之を讀む人々に信仰の心を起させ給はんことを、祈つたのである」と。それであるから私共も奮發して、救靈の爲に力を盡さねばならぬ。殊にあらゆる機會を捉へて、箇人傳道に盡瘁したいものである。救靈の力は、之に従事する間に、自ら加はり来るものである。「凡て有てる人は、與へられて愈々豊ならん。されど有たぬ者は、其の有てる物をも取らるべし」と、耶蘇が仰せられたのは、此の場合によく當嵌まる御言である。

ムーデーが米國の市俄古にて、まだ靴屋の店に勤めて居る頃のことであつた。或る日曜日に、日曜學校の組長が一人缺席したので、代理として其の組を受持つ

た處、此はいかにも輕薄な、さうさうしい少女らの一組にて、ムーデーを見て之を笑ひ侮り、少しも言ふことを聞いてくれないので、ムーデーは持餘し、寧ろ戸をあけて、彼等を残らず教室の外に逐ひ出してしまはうかと、考へたほどであつた。處が其の週のうち、前の缺席した組長といふのが、ムーデーを訪ねて來て言ふには、「私は復、肺から出血した。逆も此の上、長く市俄古の市に住んでゐることが出來ないから、近日郷里の紐育州へ、死に歸るつもりである」とのこととで、その様子が、如何にも悲しさうであるから、段々話をして見ると、其の人が言ふには、「私は去數年間、あの日曜學校の一組を受持ちながら、終に其のうち一人をも基督に導くことが出來なかつた。私はあの少女等に對し、益を與へないで反つて害を與へたことを恐れる。そのみが、此の際何よりの心がかかりである」と、いふことであるから、ムーデーは甚く之に同情し、「貴君がそんなに感じられるなら、市俄古を出發せらるる前に、組の少女等を一人一人訪問し、貴君の

心中を述べて去られたが宜しからう。若し希望なら、私が同道して巡りませう」といひ、無論自動車のない時代であるから、馬車を雇うて、二人で一軒一軒、組の少女らの家々を訪問することゝなつた。かくて少女らを其の家々に訪ねて、しんみり話して見ると、最早笑ひごとでもなければ、戯れごとでもない。皆組長の口から出づる眞實なる勸告の言を聞いて、罪を悔改め、信仰に入らんことを、誓はざるはなかつたのである。こんなにして次から次へと、一軒宛まはり、終に十日かゝつて少女らの家々を、残らず訪問したが、少女らは又一人のこらず、悔改めて基督をうけいるゝことなつた。然る後一夜、其の組長の爲に送別會を催さるゝことになると、組の少女は残らず之に出席し、組長がヨハネ傳第十四章を讀んで短い勸話をした後、ムーデーが祈をし、それを終へて、閉會しようとする時、一人の少女が涙ながらに、組長の爲に、神に祈つた。それがすむと更に他の少女が祈り、又他の少女が祈り、終に組中悉く涙の祈をさへげた時、そこに居る者の中

で、最も感動したのはムーデーであつた。「オ、神よ、今宵の、此の恵を失はんよりは、むしろ私の生命をとり給へ」と、彼は衷心から叫んだのであつた。其の次の夜、いよいよ組長が市俄古を立つといふので、ムーデーが之を見送に行くと言ひ合せたやうに、少女らも一人又一人、終には組中残らず見送に來た。蒼白い顔した組長は、汽車の窓から首を出して、最早物を言ふ氣力がなから、唯指のべて天をさし、やがて彼處で再會を期するといふ意味をあらはして居たのは、いかにも感激の深い場面であつた。此の出來事はムーデーをして、其の前途、極めて多望なる實業界に見切をつけて、救靈の事業に身を投ぜしむるに至つたのである。即ち彼は救靈の事業が、如何に高貴なる、基督的の奉仕であるかといふことを、此の十日間に實驗して堪らなくなり、終生を専ら其の爲に獻ぐるに至つたのである。彼は靴屋の店にて、最後の一年に約金一萬圓を儲けた。此はその當時に在つては、中々巨額の金であつた。けれども彼が其の方面の事業をやめて、宗

教の運動に着手した最初の年は、その収入が、約金六百圓に過ぎなかつたといへば、唯それだけでも、如何に彼が救靈者となる爲に、犠牲を拂ふことを厭はなかつたか、察せらるる。

此の如く救靈の事業は、一度之に關係した者が、到底忘れることの出來ない位、最も幸福にして、且最も重要な奉仕である。此は何も専門に、それに身を委ぬる人々のみでなく、凡ての眞面目な基督者、又救世軍人が、ひとしく經驗する所である。畢竟私共は、他人の救の爲に戦うてのみ、眞に基督の苦難に與ることが出来るのである。救靈は最も基督的なる奉仕である。「人の子の來れるは、失せたる者を尋ねて救はん爲」であつたからである。救靈の中に眞の喜悅と快樂とがある。所謂「悔改むる一人の罪人の爲に、神の使たちの前に喜あるべし。」又「我には我が子等の、眞理に循ひて歩むことを聞くより大なる喜はなし。」などいふ喜悅、又快

樂は、たゞ眞に靈魂を愛して、其の救の爲に苦心する者にのみ、經驗し得る所のものである。

一四 總動員

「ロマ人は其の刀を短縮した時、其の領土を延長した」と言はれて居る。それと同じ様に基督の戰士たる私共も亦、種々なる計畫や、工夫や、議論や、評定にのみ時を過すことを止め、單刀直入、箇人に肉薄して、彼等を救ふ爲に戦争したなら、今までよりも、もつと有効に、又迅速に、神の御國をもしひろめ得るに相違ない。今の憂は私共が、餘り架空な事のみ目論む間に、反つて着實に、一人一人を救ふことを怠る所にあらうかと、考へらるる。

左に掲ぐるは、米國の或る市にて、大規模の特別傳道が行はれた時、其の書記として働いた一婦人の懺悔談である。

「私は此度の大傳道に對し、其の幹部に屬する一書記として、日夜寢食を忘れて、事務だの、通信だのに没頭して居る處へ、私の父が大會に出席する爲に出て來ら

れた。取敢ず同道して、近所のホテルへ食事ゆき、食卓にて種々、今度の大傳道の計畫など話をすると、父は喜んで之を聞いて居られたが、やがて給仕人が向ふに往くの見送りつつ、『私は先刻、少しばかり、あの給仕人に、其の靈魂のことに就いて話して居つたのである。どうやら彼は悔改めて、基督を受入れるらしく思はれる』と言はれた。私はそれを聞いて、愕然として驚いたのである。私は市民に對する大傳道のことのみ考へて、反つて現在、我が食卓に給仕する人の、靈魂のことなど全く忘却して居つたからである。かくて後私は父を伴うて、自分の宿所に歸ると、折柄ジムといふ黒人が、いつもの如く窓硝子を拭きに來て居つた。ジムは正直な労働者で、よく忠實に窓の掃除をすることは、私も知つて居つたが、それより以上に、何等彼に就いて考へたことがなかつた。然るに私の父は、宿に着くと直にそのジムに話をしかけ、之に耶蘇の救を説いて居らるのであつた。そこへ一人の大工が戸の損じた所を直しに來た。私は彼が早く仕事を終

へて歸つて行けば可いとのみ思つて居ると、父はいつの間にか、早や彼の傍にゆき、之に天國の戸が耶蘇によつて開かれ、誰も閉ぢ得る者のないことなど、話して居られた。それから私は父を伴ひ、自動車で其のあたりを案内してまはつた。さうすると父は運轉手に對ひ、親切丁寧に、基督の恵を説き出されたのである。歸つて後言はるるには、『私は今一遍、彼の運轉手に出あふかどうか、分らないから、機會を捉へて、其の靈魂に對する注意を促したのである』と。父の滯在中、或る鐵道の役員が、父を誘うて、最新式の大型自動車にのせて、そこらを見物すると、父は車中で其の夫人に、救の必要を語られたのである。而して言ふには、『どうも誰一人、今迄率直に、彼女に悔改を促したものがなかつたらしく』とのことであつた。斯して私は數日間、父がいかに一人一人の靈魂を愛し、其の救に熱心するかを實際に示され、甚く自らを省みたのである。父が捉へたやうな機會は、悉く私にも來て居つたのである。しかし乍ら父がそれらの機會を

捉へて、神の御名を廣めて居る間に、私は唯全市民の救といふやうな大計畫と、其の事務とに没頭して、日夜寢食を忘れて働いては居れど、さて實際に、一人の靈魂を救主に導くことをしないで居つた。どういふ腑甲斐なきことかと、今更のやうに、恥ぢ且悔んで居るのである」と。

それであるから私共に大切なるは、兎も角も手近い處に見出さるる、一人の靈魂を救ふ爲に盡力することである。大な計畫工夫は可い、又行届いた評定や議論も悪くはあるまい。しかし乍らそれら凡てに愈つて肝要なるは、取敢ず一人の靈魂を救ふことである。しかもそれを、私共が總がかりで行ふに於ては、これ位有効に、又迅速に、多人數を救ふ道は、他にないのである。米國の救世軍にて、伊太利人なる一兵士が、同じく一人の伊太利人を信仰に導き、それから二人で心を合せ、神に祈りつつ盡力するうち、更に三人の人々を救主に連れ來ることが出來た。そこで五人相談の上、一小隊を起し、戦ひ始めたのが、やがて米國

に於ける、最初の伊太利人小隊であつたと、聞いて居る。

スポルジョンの驚くべき成功は、彼の稀有の大説教によつたのは、申すまでもない。しかし乍ら、彼の下には、かねてから箇人傳道に熱心する幾多の信者があり、其の骨折つて種を播いた結果を、スポルジョンに獲らせた爲に、あゝした目ざましい成功を得たのであつた。彼の晩年に至りては、毎年少く共三千人か、或は其の以上の者が彼と握手し、熱心に他人の救の爲に盡さんことを約束して居り、それらが日頃箇人的に傳道した人々を連れて、彼の集會に出席して居るのであるから、彼の説教を聞いて、悔改むる者が多くあるのみならず、その人々が又大部分は、のちのち迄も、信仰生活を續けたといふに、不思議はないのである。

リリアンといふ一人の少女があつた。或る工場へ女工として入つたのであるが、或朝、仕事をしながら、救世軍の軍歌をうたひ出した爲に、忽ち周圍から嘲笑罵詈をあびせかけられ、果は「救世リリアン」といふ仇名をさへつけられて、毎日

のやうに朋輩から愚弄せられ出した。格別に女工の中に烟草をのみ始めたものがあるのを見て、リリアンが「それは宜しくないことでせう」というて、諫めたものであるから、其の以來一段と朋輩の反抗を招くに至つたのである。さりとてリリアンが眞剣に勞働すること、又その柔和で、親切な行動等に對しては、誰も非難を加へ得る者がなかつた。其のうち或日、リリアンを一番ひどくいぢめて居つたジェーンといふ女工が、どうかしたはづみで、急に頭の髪を機械に食はれ、鐵砧の上へ横倒しになつた所へ、重量四百噸の大鎚が、落ち來らんとするのである。それと氣のついた朋輩らは、皆悲鳴をあげて工場の外に遁げ出したが、ただ一人、このつたのはリリアンであつた。急ぎジェーンの捉へられた髪を、刃物で切つてはなし、之を危機一髪の間で救うたのは善かつたが、其の際彼女は、自分の左の腕を機械に挫かれて、ひどい大怪我をした。急ぎ病院にかつき込まれ、手當をした甲斐があつて、命ばかりは助かつたが、左の手は全然つかへなくなつて、

彼女は、生れもつかない不具者となつた。工場の方では彼女の人物を惜み、不具者になつて後にも、彼女に出來さうな軽い仕事をさせて、引續き之を使用することとなり、彼女が今一度工場に出て來ると、其のお蔭で命拾ひをしたジェーンが、彼女に抱付いて接吻した。その状をはたで見居つた者が、一人として涙を催さざるはなかつたのである。かくて其の日の仕事が終わつて、一同工場を出ようとする時、ジェーンは少し高い處に立ち上つて、その朋輩たちに呼びかけた。「皆さん。リリアンの犠牲獻身の精神を表彰する爲に、金を出し合せ、襟止一箇を買つて贈りたいと思ひますが、どうか賛成して下さいませんか」と。之を聞いて拍手喝采は一同の間から起つた。もとより誰一人、異存のあらう筈がなかつたからである。するとリリアンは、急ぎジェーンと代つて起ち上り、「皆さん、私の爲に襟止など買ふことはやめて戴きたい。しかし若しあなたがたが、私に親切をして下さりたいとなら、私からお願申上げたいことがありますから、どうか聽いて

戴きたい。それは他でもない、どうかあながたが、烟草を吸ふことを止めて、其の代金を貯金していただきたいのであります」と言ふと、女工らは其の私のない、親切な需に感動させられたものと見え、一人のこらず直に之に同意することとなり、忽ち五百圓ばかりの貯金が出来たのみならず、女工らの仕事の能率は、其の時から二割五分を増し、それ迄頻りに近所の活動寫真館に足を運んだ女工らが、爾來打連れて救世軍に出入するやうになり、前には「救世リリアン」と仇名せられた彼女が、今では「われらのリリアン」として、全工場の尊敬と信任とを搏するに至つたのである。無智無學の一少女と雖も、眞に基督に救はれて、他人の救の爲に戦ふ時、往々にして、此うした偉大なる奉仕をなし得る例さへあると思へば、私共は誰も皆自ら侮つてならぬ。反つて神の御力に勵まされつつ、銘々の立場から、極力靈魂の救の爲に盡瘁するやうでなくてはならぬ。

フラムバルの「箇人に對する箇人の働き」といふ書物の中に、次の如く言うてある。「一時に一人を救ふことは、やがて全世界を救ふべき最良の方法である。世界は一箇人の集合である。基督は一箇一箇の人間が、彼に奉仕することを要めて居給ふ。それ故基督の愛と、世界の需要とを思ふ者は、最も多く一人一人の靈魂を思ひ、又最も多く其の爲に力を盡すべきである」と。私共は基督の榮光と、又同胞の救との爲に、他にいかなる奉仕をし得ない迄も、少く共一人一人の靈魂を救はん爲に奮闘すべく、又他にいかなる奉仕が出来たにしても、も一つ其の上に、殊に箇人傳道に其の主力を注がねばならぬ。日本國民を救ふ道は此の他にないのである。又世界人類を救ふ道も、斷じて此の他にないのである。

一五 基督の模範

耶穌基督は箇人傳道者の模範である。其の公生涯に於ける三年間、彼が如何に多くの時間と、精力とを、箇人傳道の爲に用ゐられたかは、驚歎すべき事實である。

第一、彼は所を嫌はず、箇人傳道をなし給うた。ニコデモと語り給うたのは、旅の宿でのことにて、取税人の長ザアカイを教へられたのは、彼の住居を訪ひ給うた時のことであつた。不義をした時捕へられた婦人に、罪の赦を宣へ給うたのは、オリブ山下の出來事にて、レギオンにつかれた男を解放し給うたのは、ガラヤ湖畔での御業であつた。サマリヤの女には、井側にて活ける水の譬を語り、取税人マタイには、其の役所に居る時、之に呼びかけ給うたのである。又二人の弟子は、エルサレムからエマオに往く途上で、復活の主に見えたといふやうな記

事があり、彼が如何に所を嫌はず、人々に傳道し給うたかを察するに足るのである。此の如く箇人傳道は、殊に何處でも、之を試みらるる所が有難いのである。私共は宗教を、會堂や堂宮の中に封じ込んでおはならぬ。反つて何處にも在す神を、何處にも證言して居るやうでありたい。箇人傳道を隨所に試みよ。

第二、彼は機を捉へて、いつでも箇人傳道を行ひ給うた。アンデレと今一人の青年とは、午後四時頃から耶穌を宿所にたづね、其の日はそこに留まつたといへば、何れ夜どほし彼の貴き唇から出る、恩寵の言に聞きとれて居たのであらう。「君と一夜の話、十年の讀書に愈る」と古人が言うたのは、斯る有様であつたらうかと、なつかしいことの極みである。ニコデモも亦之と同じやうに、耶穌をエルサレムに於ける宿所に訪ひ、新に生るべきことに就いての、結構な御教訓を承つたのである。ヤコブの泉の側にて、サマリヤの女を相手に種々御説示になつた模様につき、ヨハネ傳の記者は、「耶穌、旅路に疲れて、泉の傍に座し給ふ、

時は第六時頃(今の正午頃)なりき」というて居る。彼が日中、旅の疲勞を忘れて、唯一人の婦人の救に苦心せられた状が、偲ばるゝではないか。使徒パウロは後に、「汝御言を宣傳へよ、機を得るも機を得ざるも、常に勵め」というて居る。而して其の言通を、前以て實行したものがあるとすれば、主耶蘇こそ實に、其の第一人者であつたと、言はねばならない。

第三、耶蘇はあらゆる種類の人々を相手に、箇人傳道を試みられた。アンデレと今一人の青年の如きは、熱心道を求めつゝ彼に來つたものである。しかし乍らニコデモに至つては、基督教の賛成家ではあつたが、どれほど耶蘇の御教を我が身に引當てゝ考へる覺悟があつたか、覺束ない。一方には世の人から「取税人、罪ある者」と見下げらるゝ人々が、彼に近づき來ると共に、他方には又病人や、不具者や、其の他頼邊なき多數の者が、彼の許に集つたのである。さうかと思へば、年若き宰にて、其の財産に強い執着を有しつゝ、それでも如何に永遠の生命

を嗣ぐべきかを、問に來た者があり、或は十字架の上に息絶えなんとして、「耶蘇よ、御國に入り給ふ時、我を憶え給へ」と祈る者があるなど、彼が箇人傳道の相手となつた人々の種類は、随分種々雑多であつたと言つて可い。それも其の筈である。彼から見れば、萬民は皆神の子にて、何れも全世界に換へ難き、貴き靈魂を有するものであるから、彼が此等種々雑多の人々の救の爲に、それぞれ渾身の努力を惜まれなかつたのは、もとよりさもあるべきことである。即ち彼の言に、「此の小さな者の一人の亡ぶるは、天に在す汝等の父の御意にあらず。」又「汝等慎みて、此の小さな者の一人をも侮るな。我汝等に告ぐ、彼等の御使たちは、天に在りて、天に在す我が父の御顔を常に見るなり。」などというてあるのは、其の謂ではないか。

第四、それでは耶蘇は、如何にして、彼等に接近し給うたかといふに、多くの者は、向ふから訪ねて來たのを幸に、之を救に導き給うたのである。即ちアン

デレや、ナタナエルのやうに、先方から道を求めて来た場合は言ふ迄もなく、四人の友人に擔がれて来た中風患者や、又は學者やパリサイ人に引きづられて来た不義した女の如きをさへ、彼はいかにもして、それ等凡ての人々を、義しき道に歸せしめんことを努められたのである。彼は又しばしば人の家を訪問して、其の家族に箇人的の傳道を試み給うた。即ちカペナウムにて、ペテロの姑を訪ね給うた如き、ベタニヤにて、マリヤ、マルタの家をおとなひ給うた如き、是である。或は途中で出あひがしらに、人々を祝福し給うたやうなことがあり、多くの鬼に憑かれた男を救はれた如き、生れなからの盲人を助け給うた如き、其の實例の一二である。或る場合には、態と旅する者の道連となつて、之を教へ導き給うたことがある。即ち二人の弟子と偕に道を歩んで、之に聖書の奥義を説明し給うた如きは、其の一例に過ぎない。最後には、竝んで立てる十字架の上から、悔改むる罪人を指導し給うたなど、彼がどこ迄忠實に、靈魂の救の爲に盡されたかを見るべき、最も著しき事實である。

第五、彼の箇人傳道の成績は、如何といふに、多い中には、彼のこれほど大なる愛と誠とを餘所にし、此の世の財寶に未練をのこして、彼を離れ去つたものがある。年若き富める人が、彼から其の有てる物を悉く賣りて、貧しき者に分け與ふべきことを示され、甚く悲みつゝ、去り行きし如きはそれである。しかし乍ら多數の者は、彼の親切なる導により、其の場で悔改めて、救の恵に入つたのである。取税人の長ザアカイが、耶蘇を其の家庭に迎へ入れ、罪を悔改めたしるしに、「主、視よ、我が所有の半を貧しき者に施さん、若し我、誣ひ訴へて人より取りたる所あらば、四倍にして償はん」と言ひ出し、彼から「今日、救は此の家に來れり」というて、喜ばれた如きは、其の代表的の事實である。中には又、彼から肉體上の疾苦を醫されんことを求め、それを手づるに、併せて靈魂上の救をさへ與へられたものがあつた。四人の友人に擔はれて来た中風患

者は、もともと肉體上の病を醫されん爲に來たのであれど、同時に亦「汝の罪赦されたり」との、有難き御聲に接したのである。ペテスダの池畔に、三十八年來の痼疾を醫された男は、又やがて「視よ、汝癒えたり、再び罪を犯すな、恐らくは更に大なる惡しき事汝に起らん」との、いとも親切な御警告を戴くこととなつたのである。耶蘇は救靈以下の何物を以ても、満足し得ないお方であつた。彼によつて恩恵を受けた者の中には、直に之を周圍の人々に證言した者さへ、少くなかつた。レギオンを逐出された男は、「往きて主が、如何に大なる事を、己になし給ひしかを、デカボリスに言ひ弘め」た、といふことである。又血漏を醫されし婦人は、極めて内氣な女性であつたが、それでも耶蘇から促されて「來りて御前に平伏し、ありしまゝを告げ」たとある。そは「人は心に信じて義とせられ、口に言ひあらはして救はる」べきものだからであつた。

アンデレは耶蘇を見出した翌朝、兄弟ベテロを彼の許に連れ來り、ピリポは彼に従ふ決心をするや、友人ナタナエルに遇ひ、來りて耶蘇を見るべきことを告げた。若夫れ取税人マタイに至つては、自分が悔改めて、不正の業務を抛つべきことを覺悟すると直に、其の友人知己を招待し、耶蘇にお出を願うて、彼の新しき信仰上の立場を發表した如き、随分思切つた仕方である。彼が後日、十二使徒の一人として、主の福音を宣傳するのみならず、前には帳面づらを誤魔化す爲に用ゐた筆を洗ひ、マタイ傳福音書を著すに至つた如きは、眞に故あることと言はねばならない。

彼と並べて十字架にかけられた二賊の中、一人は、死ぬるいまはの際に悔改め、彼から其の日の中に、バラダイスに移さるべき約束を得たのであつた。耶蘇基督の箇人傳道には、此の如く目ざましき好結果があつた。どうか私共も、神の助により、彼の模範に倣ふことによつて、亦さうした成功ある箇人傳道を試みたくものである。

箇人傳道終

昭和七年二月二十九日印
昭和七年三月五日發行

定價金二十五錢

東京市神田區一ツ橋通町五番地
著作兼發行者 山室軍平
東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷者 龜谷良一
東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷所 日東印刷株式會社

不許
複製

Printed in Japan

發行所

東京市神田區一ツ橋通町五番地
救世軍出版及供給部
(振替東京四四〇〇番)

中將山室軍平著 (四六判二五〇頁)

靈魂の救

定價金五十錢
郵税金六錢

本書は著者が罪に亡ぶる一人の靈魂をも神に立歸らせたいと云ふ熱望から、去る數年間に互り「とき」のころ紙上に掲げた文章五十編を編纂したもので、簡潔な文章の中には、靈魂の救に對する著者の熱誠が躍動して居る。何が今の時代に緊急かというて、靈魂の救以外に他に緊急事があるとは思はれない。本書の出たことは機宜を得たものといはればならぬ。

ブラムエル・ブース夫人著 (四六判ケロース表紙 二九八頁)

救世軍人の力

定價金一圓二十錢
郵税金十錢

救世軍人は勿論——基督信者の必讀書

- 目次 一、緒言 二、生來の力 三、確信の力 四、救世軍主義 五、秩序ある事務
- 六、戰鬥力の振興 七、人を知れ 八、訪問 九、施濟 十、祈禱 十一、斷食

中將山室軍平著 (四六判三〇〇頁)

聖潔とは何か

定價金五十錢
郵税金八錢

唯所謂聖潔の教の有難いことは、斯して東西古今の聖徒が憧憬し、祈求し、精進して漸く之を見出し、或は僅に門戸をくゞつただけで、終に其の堂奥に達し兼ねた程の恩寵を、今は無學の凡人なる私共にも公開し、斯うした高く、且深き宗教的體驗を、案外容易に獲得し得るやう、其の道を指示す所にある。しかも此の如きは單に私共の爲に、肉を割き血を流し給うた救主の功德によつて、然るものである。(著者序文の一節)

ブレンゲル中將著
山室中將譯 十六版(四六判二〇七頁)

聖潔之葉

並製金四十五錢
上製金八十錢
郵税金六錢

「此の書は其の讀者をして、直ちに聖書に説いてある如き、聖潔を受けしめん爲に著されたものである。著者は救世軍の一士官にて、此の書に録された如き恩寵の經驗を有し、著しく神に用ゐられて、其の品性、又は言語を通じて、主の民を聖潔に導き、罪人を救に入らしめて居る人物である。私は此の書及び其の著者を、凡て世の神と其の御國とを愛する人々に推薦する云々」(ブラムエル・ブース大將)

振替東京
四〇〇〇

救世軍出版及供給部

東京神田
一ツ橋通

振替東京
四〇〇〇

救世軍出版及供給部

東京神田
一ツ橋通

救世軍出版物

十字架の教	罪より救ふ力	軍令及軍律 <small>(兵士の巻)</small>	實行的基督教	基督傳の教訓	再生の恵人	山室機恵子	カサリン・フース	私 <small>の</small> 青年時代	五 <small>の</small> 十二文集	基 <small>の</small> 督教講話	使徒的宗教	聖書の宗物	人生の旅	平民之福音	
								上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	
二五	二五	二五	四〇	五〇	五〇	七〇	九〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	二一	
四	四	四	四	六	六	六	六	六	八	三	三	三	八	五〇	
														四	
羅馬書 <small>附エペソ書</small>	使徒行傳	ヨハネ傳福音書	マルカ傳福音書	マルコ傳福音書	マタイ傳福音書	十分の一獻金論	聖書の感化力	労働の宗教的意義	基督教と日本人	一人が一人を	病 <small>の</small> 清 <small>き</small> 慰 <small>安</small>	心 <small>の</small> 清 <small>き</small> 者	青年への警告	禁酒の基督教	禁酒のすゝめ
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
〇五	二七	〇五	二七	〇五	二七	一	一	一	一	一	一	一	二	二	二
〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	五	〇	〇	〇	〇	〇	五	〇	〇	〇
六四	六四	六四	六四	六四	六四	二	二	二	二	二	二	四	四	四	二
															四

京東替振 〇〇四四
救世軍出版及供給部
 田神京東 町通橋ツ一

終

